論　考　編

遼金代の長城について　―その目的と機能の比較―

今野　春樹

1　はじめに

中国北東部からロシア南部、モンゴル東部にわたる草原地帯に２条の長城が存在する(図1)。両長城は南北に位置し、等しく東西方向に展開している。北側の長城はチンギス･カン長城、南側の長城は金界壕として通称され、これまでに多くの研究者によって長城の経路と構造、創建年代や建設目的などが議論されてきた。長城の経路や構造、創建年代については現地調査の成果を踏まえて、主に考古学、文献史学の観点から検証が行われ、建設目的については長城の周辺に存在した民族との関連性に重点が置かれて、研究がなされている。特にチンギス･カン長城の帰属年代については、中国の史書中に明確な記載がないことも相まって、遼・金・元各王朝にその可能性が指摘されるなど混乱が見られる。しかし近年、現地調査に基づく考古学的検証によって遼代創建説が確定しつつある[1)]。筆者もチンギス･カン長城の創建を遼代とする意見に賛同するが、まだいくつかの問題についてまだ充分に研究がされていないのではないかと感じる。

チンギス･カン長城と金界壕の建設目的については遼代では阻卜、烏古、敵烈、室韋、金代では烏骨(烏古)、迪烈(敵烈)、モンゴルなど疆域の北辺に盤居していた諸民族の南下を阻止するためとされていることで各研究者の意見は共通するが、両長城の防御施設としての運用上の相違点や建設の影

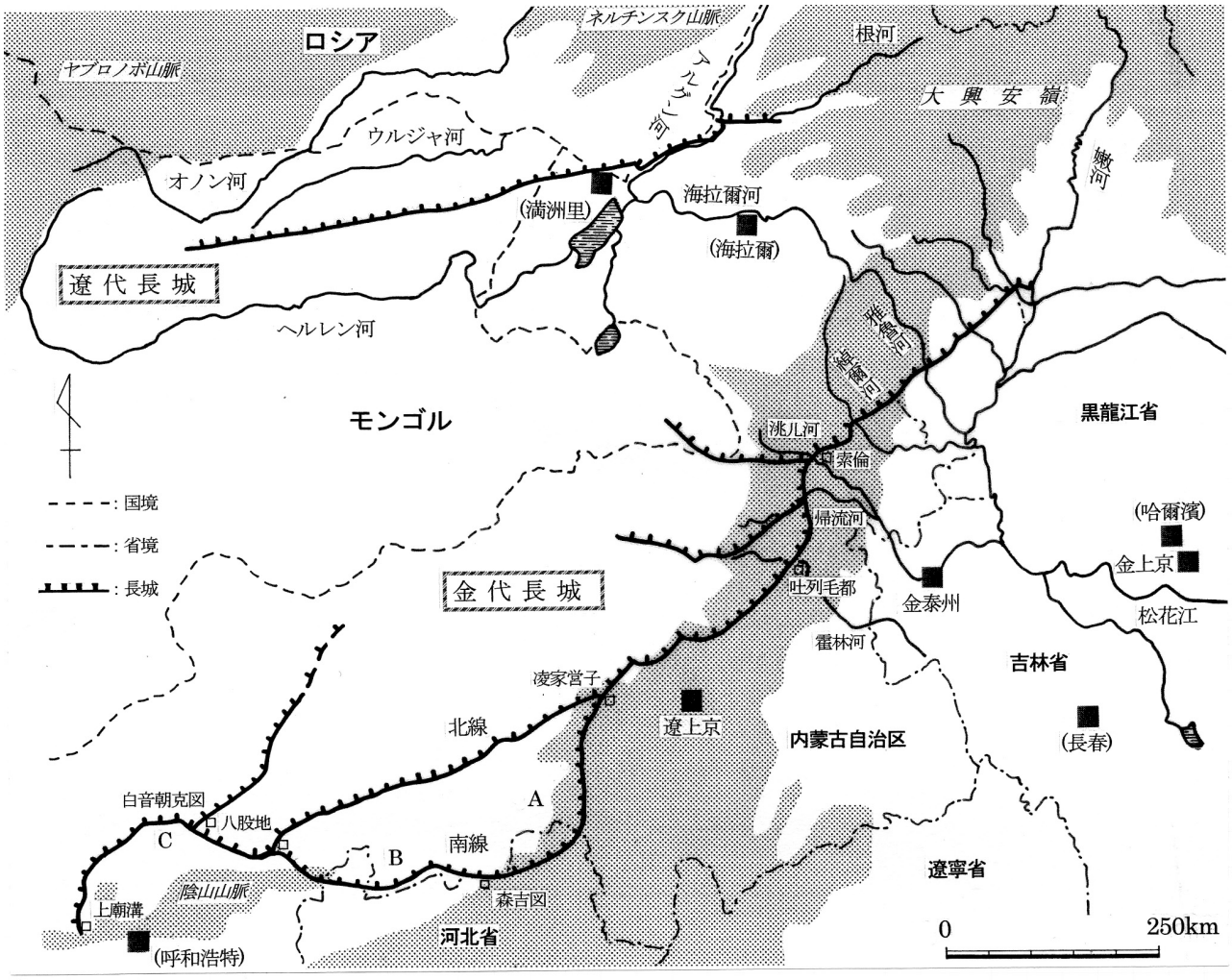

図１　遼・金代の長城

響による長城周辺民族の動向など両長城を関連させ、比較しての研究が不足しているのではないかと考える。そこで本稿では先学の研究成果を基に両長城の経路や構造、帰属年代を明らかにした上で、筆者が 1999 年と 2002 年に両長城を踏査した成果を交えながら、これら諸問題について検証を試みてみたい。

なお、既に多用してしまったが、本稿では「チンギス･カン長城」を遼代長城、「金界壕」を金代長城として名称を改め、統一して用いたい。チンギス･カン長城はその建設時期において、モンゴル諸部を統一したチンギス･カンとは全く無関係であることは明らかであり、長城に「チンギス･カン」を冠することは不適切と考えるからである。また金界壕の「界壕」は『元史』中において見られ、また『金史』中では「辺堡」や「壕」と記されているが[2)]、その建設目的が北方からの他民族侵入の阻止であり、一国の疆域を画定するほどの規模を有することから、中国北部に連なる「万里の長城」とほぼ性格が類似する。さらに局地的部分的な意味合いの強い「辺堡」や「壕」ではその特徴を表現しきれないと考えたためである[3)]。また「遼」と「契丹」の名称の使い分けについては、太祖建国時の国号は「契丹」であったが、太宗･大同元 (947) 年に「大遼」、聖宗･統和元 (983) 年に「大契丹」、道宗･咸雍 2(1066) 年に「大遼」と 3 度にわたって国号を改めており、本稿では混乱と煩雑さを避けるため、太祖による建国から滅亡までの王朝名､国号を「遼」に､「契丹」は民族名称として便宜的に使用する。なおロシア語表記の地名はアルファベットに改めて使用することとする。

2　長城の経路・構造と歴史的背景

遼代長城

遼代長城は中国内蒙古自治区北東部からロシアとの国境を経て、モンゴル東部にかけて東西に展開する。長城は断続的に続き、全長は約 700km に達する。先行する調査・研究成果と 2002 年に筆者が中国内蒙古自治区海拉爾市と満洲里市内に展開する長城に対して行った踏査成果を基に長城の経路・構造と付属する辺堡と城の位置を再構成すると (図 2) になる[4)]。

長城には付属する辺堡 17 箇所 (図 2・表 1 － 1 ～ 9) とさらに長城の南側約 100 ｋｍ前後に東西に

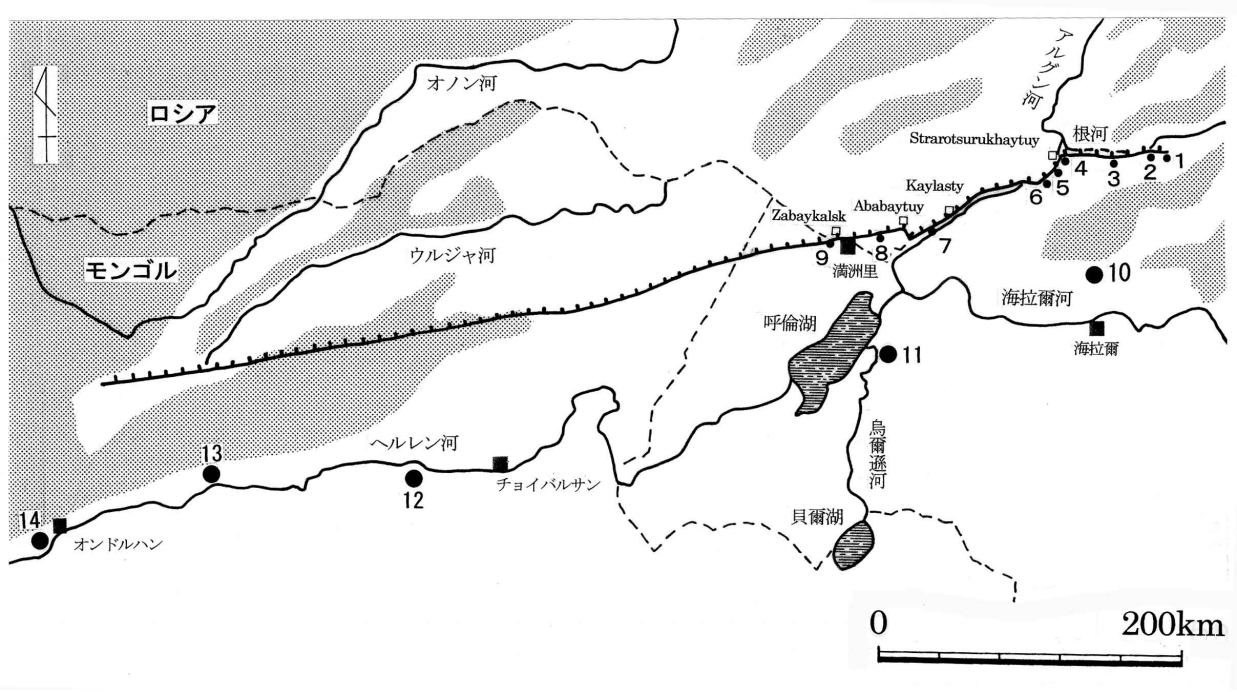

図２　遼代長城の辺堡・大型城の分布

表 1　遼代長城の辺堡と城址

No.	名称	プラン	規模	備考
1	上庫力辺堡	方形	東西 57 m、南北 58 m	
	120 隊戍堡	方形	東西 35 m、南北 36 m	
	新立隊戍堡	方形	毎辺 33 m	
2	拉布達林辺堡	方形	毎辺 50 m	
	胡蘆頭戍堡	方形	毎辺 37 m	
3	尖山子辺堡	外墻 : 円形、内墻 : 方形	内墻 : 東西 56 m 、南北 57 m　外墻径 120 m	
	小弧山城堡　北堡	方形	東西 45 m、南北 43 m	
	南堡	方形	毎辺 46 m	
	城址	長方形	東西 87 m、南北 107 m	
4	四卡辺堡	外墻 : 円形、内墻 : 方形	内墻 : 毎辺 52 m　外墻径 120 m	
5	三八四辺堡	方形	毎辺 28 m	
6	八大関辺堡	方形	毎辺 50 m	
7	上城辺堡	不明	不明	
	下城辺堡	不明	不明	
8	小城	不明	不明	
	辺堡	円形	不明	
7	60 号辺堡	円形	不明	
8	浩特陶海古城	方形	毎辺 500 m	通化州城 (項 1996)
9	吉布胡郎図古城	不明	周長 1000 m	静辺城 (私見)
10	バルス・ホト 1 号 (巴爾斯浩特) 城	方形	周長 6820 m	河董城 (景 1982)
11	ヘルレンギン・ウランエレク城	不明	不明	
12	ズーン (祖赫雷姆) 城	長方形	東西約 550 m、南北約 600 m	皮被河城 (景 1986)
	バルーン (巴倫赫雷姆) 城	長方形	東西 500 m、南北約 800 m	塔懶主城 (景 1982)
13	ウグルクチン城	不整形	東西約 1000 m、南北約 1500 m範囲	山城

1 ～ 9(米・馮 1990)　10(項 1996)　11(景 1983)　12(景 1983);(白石 1993);(マイダル・加藤 1988)　13(白石 1993)　14(白石 1993);(景 1986);(マイダル・加藤 1988)　15(白石 1993);(マイダル・加藤 1988)

並ぶ周長 1000 mを超える大型城 7 箇所 (図 2・表 1 － 10 ～ 14) が確認されている。

長城の東端は海拉爾市の北東約 125km に位置する上庫力の西約 8 キロ付近に始まる。長城東端部の南約 20 ｋｍの範囲には辺堡が南北に 3 個所並ぶ (図 2 － 1)。当初長城の東端部が上庫力付近に始まることについて疑問を感じた。しかし現地において長城の立地を詳細に観察することによってその

写真１　根河渓谷（小弧山から北を望む）

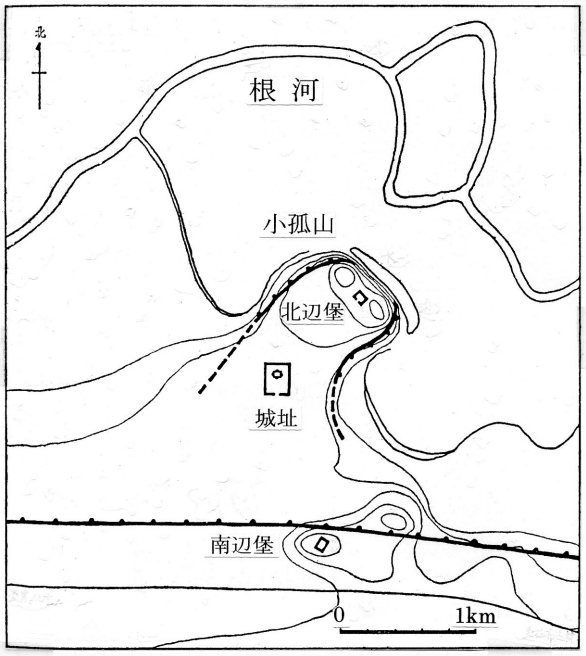

図３　小弧山城堡（米・馮 1990 に加筆）

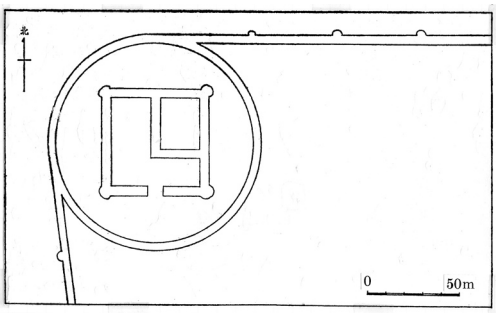

図４　四卡辺堡（米・馮 1990 に加筆）

疑問は氷解した。上庫力・アルグン河間の長城は大興安嶺西側に深く切れ込んだ渓谷の南側台地上に、渓谷内を東西に流れる根河と並行して位置する。根河の流れる渓谷は南北幅で 10 ～ 20km を測り、長城のある台地との高低差は 100 m近くあり、小弧山城堡 (図２－3) から北を眺めると根河の流れる渓谷全体を見渡すことができる (写真 1)。つまり上庫力・アルグン河間では切り立った渓谷の地形を防御の一部に取り入れることにより、また上庫力以東は大興安嶺中に入り、北からの侵入を阻止することが可能であるため、大興安嶺の麓にある上庫力から長城が始まるのである。この地域の長城の遺存状態は後述する満洲里市の西方で観察した長城に比べるときわめて悪く、幅４～５ m、高さ 0.3 ～ 0.5 mを測るに過ぎず、壕は痕跡すらも確認できなかった。

上庫力に始まった長城はアルグン河の支流である根河に沿ってその南岸を西行する。途中、拉布達林辺堡、胡蘆頭戍堡 (図２－2) を経て、尖山子辺堡、小弧山城堡 (図２－3) に至る。

小弧山城堡は１つの城址と南北２つの辺堡で構成されている (図 3)。北辺堡は根河渓谷に南側から突き出した舌状台地の突端部に位置し、平面形は方形を呈し、規模は毎辺約 45 mを測る。堡墻の遺存状態は良好であり、高さ２～３ m、幅６～ 10 mを測り、南面に門が開けられている。辺堡内には建物址や遺物の散布は見られなかった。

調査を行った米文平、馮永謙氏の報告では北辺堡の外周側約 10 mに舌状台地を囲むように長城の支道が存在するとされているが (米・馮 1990)、筆者が観察したところ、これは辺堡の外郭墻のような印象を受けた。その理由としては北辺堡の南 700 ～ 800 mに位置する長城本線に比べて幅 10 m以上、高さ４～５ mと規模が大きく、両者が同じ目的をもって造られたようには見られないからである。この外郭墻の東側部分と内郭墻内には現在、観光用の施設が建てられている (写真 2)。この北辺堡の南西約 700m に城墻と建物址をともなった城が米・馮の調査で確認されているが、その場所は現在では耕地化しており、城の痕跡は全くみとめられなかった (写真 3)。しかし耕地内には遼代の灰陶・釉

写真２　小弧山北辺堡（南東から）

写真３　小弧山城址（小弧山より南西を望む）

写真４　小山南辺堡（西から）

陶･石臼などが多く散布しているのが見られ、辛うじて城の存在を裏付けている。当日時間の都合上、僅かな遺物しか扱えなかったが、実測と写真撮影を行うことができた (表２・写真 5)。

城の南約 800 mに長城があり、更に長城の南約 100 mに南辺堡がある (写真 4)。規模と平面形は北辺堡と同じであり、毎辺約 45 mを測る。堡墻の遺存状態は良好で幅 10 m、高さ１～２ mを測り、北東面に幅３ mの門址がある。堡墻の西角の一部分が人為的に削られており､堡墻断面を観察したが、版築の状態を確認するには至らなかった。また堡墻内には遺物の散布は見られない。

写真５　小弧山城址出土遺物：右上１右下２左上３

小孤山城堡の西約 25km の黒山頭からさらに西へ 10 k mにある四卡辺堡 (図２―4) はアルグン河東岸、根河との合流地付近に位置する (図 4)。辺堡は中国人民解放軍国境警備隊駐屯地施設の西隣にあるため、通常一般人まして外国人の立ち入りは禁止されているが、交渉の結果、短時間のみの見学が許された。同行した中国人によると現在、中ロ関係が良好であることによるものが大きいと

表 2　小孤山城堡　城址出土陶器

NO	材質	器種	釉色	胎色	形態・特徴
1	灰陶	壺	無釉	灰黒	底径 6.2cm(復元値)、残高 5.0cm。内側面剥落。底部のみ。
2	灰陶	壺	無釉	灰白	底径 10.6cm(復元値)、残高 9.3cm。静止糸切。底部のみ。
3	灰陶	壺	無釉	灰黒	口縁のみ。

写真６　満州里市西方の遼代長城

言う。米・馮両氏の調査では辺堡は円形の外墻内に毎辺 52 mの方形の内墻が存在するとされているが、現地では所々にその痕跡が見られるものの、内外墻ともにほとんど消滅してしまい、辺堡全体の形状を把握することはできなかった。辺堡の北と南に続く長城は辛うじてその道筋を辿ることができる程度に残るのみであり、状況は小孤山城堡付近の長城と変わらない。四卡辺堡上に立ち西を望むとアルグン河対岸にロシアの Starotsurukhaytuy(旧祖魯海図) の町が広がり、行き交う人々の姿も見ることができる。また河沿いには鉄条網が張られ、塹壕が構築されているのを見ると、あらためて国境地帯であることを認識した。

長城はさらにアルグン河に沿って西南下し、三八四辺堡 (図２－5) を経て、八大関辺堡 (図２－6) の南でアルグン河を渡り、ロシア領内へ入る。ロシア領内ではアルグン河の北岸に沿って南西方向へ向かい、途中 Kaylasty(凱拉斯推) を経て黒山頭から約 125km の Ababaytuy(阿巴該図) から方向を西に変えて進み、満洲里市の北約 5km を通過して、国境の町 Zabaykalsk(外貝加爾斯克) の南部で再度中国領内へ入る。

再度中国領内に入った長城を満洲里市の西方約 30km の地点において見ることができた (写真 6)。小孤山城堡や四卡辺堡付近に比べると、長城の遺存状態は良好であり、横断面形は台形を呈し、下幅約７m、上幅約３m、高さ 0.5 ～ 1 mを測ったが、長城の北側に壕は確認できなかった。長城が遥か彼方まで草原を貫く姿は、壮観であった。

満州里市の北部で中国領内に入った長城は満洲里市から西へ 70km の地点でモンゴル領へ至る。モンゴル入境後はヘルレン河北岸から 100km 前後の個所をほぼヘルレン河と並行に西へ向かい、モンゴル北部のヘンティー県ノロブリン郡にまで至る。

このように長城は中国、ロシア、モンゴルを横断して連なり、各所に防備施設である辺堡が付属する。ロシアとモンゴル領内での様子は詳らかでないが、中国領内で確認されたものに限れば辺堡の平面形は方形であることで共通するが、辺堡が置かれる間隔は不規則・不統一である。また後述する金代長城に付属する辺堡と比較すると毎辺 30 ～ 50 mと規模は小さく、この程度の規模では辺堡に駐屯し守備にあたる人数もそれほど多くないことが推測される。無論まだ未発見の辺堡も存在するであろうが、長大な防衛線をこの程度の施設で北方から大挙して押し寄せる諸民族を防ぎきれるのか疑問とするところである。

長城の南約 100 ｋｍ前後離れた海拉爾河、呼倫湖畔、ヘルレン河沿いには周長 1000 mを超える大型の遼代城７基が建ち並ぶ。既にこれらの大型城は考古学的見地から調査が行われており、城内では遼代陶器などの遺物や建物址、農業用灌漑施設などが確認され、主に中国側の研究によって遼代の各辺防城や州城に比定されている (表１－10 ～ 14)。

以上が経路と付属辺堡及び大型城を含めた遼代長城の全体像である。では長城は何故この地域に建設され、そしてその建設時期は何時なのであろうか。直接的に長城建設の目的と時期に関する記述は『遼史』中には見られず、唯一関連するものとして長城の南側に東西に並ぶ辺防諸城に関する記述が『遼史　地理志』に存在するのみである。長城建設の目的については、現在の海拉爾市周辺からヘル

レン河流域の植民保護のためであることは多く指摘されている (景 1982p．196、1983p．198)、(白石 1994pp38)。『遼史』中の植民に関する記述については、建国後間もない太宗会同年間に見られる。

会同 2(939) 年　「上以烏古部水草肥美，詔北、南院徒三石烈戸居之」　　『遼史　太宗下』

会同初　　「 以烏古之地水草豊美、命甌昆石烈居之、益以海勒水之善地為農田 」
『遼史　食貨志上』

会同 3(940) 年　「 詔以于諧里河、臚朐河之近地、給賜南院歐堇突呂、乙斯勃、北院温納何剌三石烈人為農田 」　　『遼史　太宗下』

会同年間に入植が行われたのは烏古部の土地であり、そこが海勒水 (海拉爾河) 流域だったことが判る。海拉爾河は海拉爾市街の北を東西方向に流れ西は呼倫湖東岸に達し、さらに入植が于諧里河 (シルハ河)、臚朐河 (ヘルレン河) 流域にまで及んでいた。烏古は敵烈とともに唐代以来ヘルレン河下流域から海拉爾市周辺地域に居住していたとされ (津田 1916p．4)、契丹の入植によって本拠地を追われた烏古や敵烈は長城の外側である北方の森林ステップ地帯まで押し出されることになる (白石 1994p．40)。

海拉爾河、ヘルレン河流域への入植は断続的に遼後半期に至るまで続けられ、その過程においてホロンバイル地域からモンゴル東部にかけて辺防諸城が築かれる。その辺防城について『遼史　地理志一』には 9 城が記されている。

静州　「…本泰州之金山。天慶六 (1116) 年升。」

鎮州　「…本古可敦城。統和二十二 (1004) 年皇太妃奏置。選諸部族二萬餘騎充屯軍、専捍禦室韋、羽厥等国、凡有征討、不得抽移。…」

維州　「刺史。」

防州　「刺史。」

河董城　「本回鶻可敦城。久廃、遼人完之以防辺患。…」

静辺城　「本契丹二十部族水草地。北隣羽厥、毎入為盗、建城、置兵千餘騎防之。…」

皮被河城　「地控北辺、置兵五百於此防托。皮被河出回紇北、東南経羽厥、入臚朐河、沿河董城北、東流合沱漉河、入于海。…」

招州　「…開泰三 (1014) 年以女直戸置。…」

塔懶主城　「太康九 (1083) 置。在臚朐河。」

また『遼史　地理志一』辺防城の冒頭に

「遼国西北界辺防城、因屯戍而立、務據形勝、不資丁賦。」

とあるように辺防城の建設目的は遼の西北界の守備にあり、その維持には屯田兵が充てられるとされ、会同年間から行なわれた入植と連動したものであるとすることができる。この内少なくとも西方のオルホン河・トーラ河間の鎮州・維州・防州・招州は鎮州に治所を置いた西北路招討司に属し、考古学的調査に基づき、鎮州可敦城はチン・トルゴイ城、防州はハダサン城、維州はタリン・ウラン城、招州はエムゲント城に比定されている (陳 1985p．272)。

西北路招討司は 971(保寧 3) 年に阻卜を抑えるために、耶律賢適が任じられたのが始まりであり『遼史　耶律賢適伝』、鎮州・維州・防州城は 996(統和 14) 年に西北路招討使蕭撻凛が大いに阻卜諸部を破った直後に蕭撻凛の奏請によって建州されたという (陳 1985pp．268 – 269)。そしてこの蕭撻凛の阻卜討伐の際、臚朐河 (ヘルレン河) 下流域一帯において敵烈も破り『遼史　蕭韓家奴伝』、また 1073(咸雍 9) 年に耶律独迭が敵烈を討ち、臚朐河に屯した記述も見られることから『遼史　蕭迂魯』、敵烈が居住していたのが臚朐河 (ヘルレン河) 付近であったことが判る。また会同年間に契丹が入植

した場所が海拉爾河一帯の烏古の居住地であり、その後耶律世良が 1015(開泰 4) 年に曷剌河 (海拉爾河) で烏古と戦ったことを考慮すると、西から東へ順にオルホン河・トーラ河以北には阻卜、長城以北には敵烈 (ヘルレン河の北)、烏古 (海拉爾河の北) が並んで分布していたことが『遼史』の記述からも判断することができる。この内居住地が長城付近であるのは烏古と敵烈であり、長城の建設目的が辺防諸城とともに契丹の入植によって北へ追われた烏古と敵烈が旧地奪還を目論んで南下するのを阻止することにあったと考えられる。

『遼史　地理志一』辺防諸城の内、鎮州・維州・防州・招州はモンゴル国オルホン河・トーラ河間に点在する各遼代城址に比定されていることは先述したが、残り 5 城の内、静州は内蒙古科右前旗烏蘭哈達前公主嶺屯城に位置が推定され、河董城、皮被河城、塔懶主城はヘルレン河に沿って東西に並ぶ各遼代城に比定されている。河董城はバルス・ホト 1 号城 (図 2 ― 12)、皮被河城はズーン城、塔懶主城はバルーン城 (図 2 ― 14) ; (景 1982pp197 – 198) に位置が充てられるが、静辺城の位置のみが不明である。

静辺城の位置を推定することができる手掛かりとしては『遼史　地理志』において「本契丹二十部族水草地、北隣羽厥」の記述があるのみである。羽厥は烏古の別称であり (津田 1916p. 3)、「本契丹二十部族水草地」は烏古の南に位置することになる。会同年間に「三石烈戸」を入植させたのは「海勒水」(海拉爾河) 流域の烏古部地であることを考慮すると静辺城が「本契丹二十部族水草地」つまり、海拉爾河流域もしくはその付近に存在したことになる。そこでこの地域内で他辺防城と規模が匹敵する大型城址を検索すると 2 ヶ所存在することが明らかになった。1 つは海拉爾市の北約 20km の浩特陶海古城 (図 2・表 1 － 10) であり、さらに 1 つは呼倫湖の東岸にある吉布胡郎図古城 (図 2・表 1 － 11) である。

浩特陶海古城は黒車子室韋との関連から通化州城に比定されている。通化州については『遼史　地理志一』の泰州の項に見られる。通化州のある土地は「本契丹二十部族放牧之地」であり、しばしば黒鼠族に侵された。黒鼠族は黒車子室韋のこととされ、通化州が呼倫湖以東、アルグン河一帯の辺防城としての防備も担っていたとされる (項 1996p. 168)。

会同年間の契丹入植により、烏古は敵烈と共にヘルレン河・海拉爾河周辺から北へ押し出され、少なくともアルグン河以北へ移動したことは間違いなく、そうした場合烏古 (羽厥) と静辺城の位置関係は北側において烏古 (羽厥) と接するという「北隣羽厥」の記述と一致するのである。したがって浩特陶海古城は文献資料の考証に基づいて通化州城に比定されていることから、吉布胡郎図古城をもって静辺城に充てることが可能であると筆者は考える。ここで再度通化州城、静辺城及びヘルレン河流域に分布する各辺防城の位置を地図で確認してみたい (図 2)。

浩特陶海古城 (通化州城) は海拉爾河北岸に位置し、吉布胡郎図古城 (静辺城) はその西約 142km の呼倫湖東岸から分流する烏爾遜河東岸に位置する。バルス・ホト 1 号城 (河董城) はヘルレン河 (臚朐河) 南岸にあり、その西約 132km にヘルレンギン・ウランエレク城が位置する (図 2 ― 13)。ヘルレンギン・ウランエレク城は『遼史』中においてその存在を示すような記述は見当たらないが、考古学的調査に基づき、当城が遼代城址であることは検証されていることから、位置的立地的に考えて『遼史』の記載から漏れた辺防城である可能性が高い。さらにヘルレンギン・ウランエレク城の西 125km にはズーン城 (皮被河城)、バルーン城 (塔懶主城) が位置する。

分布を外観するならば明らかであるが、通化州城及びヘルレンギン・ウランエレク城を含めた 4 辺防城は呼倫湖を挟んで海拉爾河とヘルレン河流域上に東西方向に一直線に並ぶことが判る。しかも長城と各城間はほぼ等距離 (80 ～ 95km) を保っており、各城の間隔もほぼ等しく 125 ～ 142km を測る。

ここからは長城と各城がある一定の計画性をもって配置されていることが判り、長城と各城が連動して北方からの烏古・敵烈の進入を防いだということが推測できる。しかしそう考えた場合、1つ問題点が発生する。それは吉布胡郎図古城(静辺城)とバルス・ホト1号城(河董城)間に約320kmにわたって城の存在しない空白地帯が存在することである。もし東西に連なる諸城と長城が連動した防御機構であるならば、長大な防衛線上に空白地帯を作ることは不適当であると考えるからである。

現時点ではこの間に城址の存在は確認されていないが、場合によっては未発見の辺防城が存在するのかもしれない。そこで可能性の一つとして、その位置を推定してみたい。まず各城址間の平均距離は約133.3kmであることから、この距離をもってそれぞれ吉布胡郎図古城(静辺城)から西へとバルス・ホト1号城(河董城)から東へとそれぞれ推定地点を求めると、約46kmの不足誤差が生じてしまう。そこで防衛の対象となる烏古・敵烈は遊牧民族であることから、長城以南への侵入には騎馬をもって行ない、吉布胡郎図古城(静辺城)とバルス・ホト1号城(河董城)間にある呼倫湖を騎馬では直接渡れない要害として考え、呼倫湖の最西岸を起点に再び西へ133.3kmの位置を求めると、驚いたことにバルス・ホト1号城(河董城)から東へ133.3kmの地点と合致するのである。その場所はヘルレン河流域で各辺防城が連なる軸線上にある中国とモンゴルの国境線上である。仮説通りであるならば、この地点に未だ発見されず、『遼史』の記載から洩れた遼代辺防城が存在する可能性が高い。

発見されなかった理由としては筆者も遼代長城の踏査において経験したが、国境地帯は現地人においてもその立ち入りを制限される。そのため今まで調査に入ることができず、見落とされてきたのではないだろうか。もしこの地域に大型城址が存在するならば130km前後の間隔をもって辺防城が東西に並ぶことになり、これらの城は単独で防衛するのではなく、長城や他の辺防城と連携して北からの烏古・敵列の侵入に備えることができる。またこの諸城の連携は有事の際の通信手段としても有効であったであろう。西方の西北路招討司管内において阻卜などの侵入を受けた時、その状況を東方の遼上京に連絡し、折り返し指示を仰ぐこともできるのではないであろうか。そこからは後代モンゴル帝国内に張り巡らされたジャムチ(駅制)が起想される[5)]。ジャムチは火急の際、馬を駅ごとに乗り継いで情報を伝えるシステムであるが、遼代においてもこのシステムが存在した可能性は高い。遼代にジャムチに類似した通信手段が存在したかについては明らかではないが、130km前後という距離が情報の伝達において有効な距離であったとも考えることができる。

いづれにしても地図上での推測に過ぎないためこれ以上のことを述べることはできないが、筆者の仮説通りであれば、中国・モンゴル国境線上でヘルレン河沿いに未発見の遼代辺防城が存在することになり、東西に並んだ辺防諸城が長城とともに遼の西北界の守備を担い、さらに通信手段としての機能も有していた可能性もあるのである。

以上を総合して考えるならば、遼代長城の建設は入植とその保護を目的の一つとした辺防諸城の成立と関連することになり、その時期は、『遼史　地理志』辺防城に見られる皇太妃が鎮州城の建設を命じた統和22(1004)年から臚朐河(ヘルレン河)に塔懶主城が置かれた太康9(1083)年間とすることができる。

金代長城

金代長城の東端は呼倫貝爾市莫力達瓦達斡爾族自治旗尼爾基の北約5kmの嫩河東岸に発する[6)]。途中、黒龍江省斉斉哈爾市北西部と河北省北部を通過するが、それ以外は内蒙古自治区内を北東－南西方向に連なり、西端は呼和浩特市の北西約62kmの上廟溝に達し、尼爾基から直線距離で約1350kmを測る(図1)。

長城は断続的に連なり、3ヶ所において支線の分岐が見られる。まず烏蘭浩特市の北西約83kmの索倫から西へ分岐した支線はモンゴル東部に達する。次に索倫の南約43kmの地点から西へ分岐し、東烏珠穆沁旗内に至る。この分岐した2線はモンゴルへ達するとされるが、その終点地は具体的には不明である。

さらに南西行した長城は林西県の北約37kmの凌家営子付近において南北線に分岐する。北線は南西行して錫林浩特市、正藍旗、正鑲白旗内を通過して呼和浩特市商都県の北約55kmの八股地において南線と合流する。南線は凌家営子から南下し、克什克騰旗を通過して赤峰市二龍庫から河北省圍場県三義永を経てから方向を西へ変え、河北省豊寧県、内蒙古多倫県、太朴寺旗、再度河北省康保県を経て呼和浩特市化徳県から西北に向きを変え、商都県八股地で北線と合流する。合流した長城はさらに西進し、四王子旗治所の北東75kmの白音朝克図付近から北東へ分岐し、この支線もモンゴルに達するとされるがその終点は不明である。分岐後長城は西進しつつ、次第に孤を画くように南下し、呼和浩特市武川県治所から南西約54kmの上廟溝に至る。

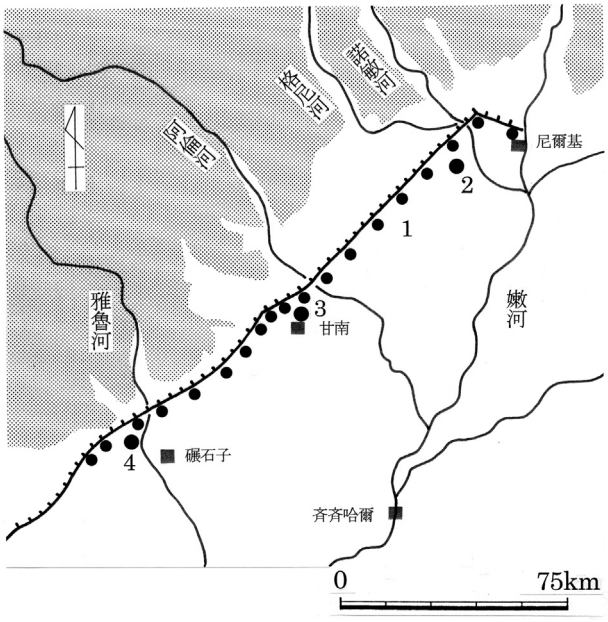

図5　金代東北路長城と辺堡・大型城の分布

遼代長城は単列の濠と墻で構成されているが、金代長城の場合、部分的ではあるが濠と墻が複数列をなしている個所が確認されている。長城東部の碾子山では北から南(外側から内側)に副墻・濠・副墻・濠・主墻の順に築かれ(黒龍江博物館1961p. 253)、西部の赤峰市内では壕については明記されていないが、墻は二重であり、外墻高さ0.5 m、幅3～5 m、内墻高さ1 m、幅0.8～1 mを測り、克什克騰旗南部、四王子旗～達茂連合旗間(李2001pp. 43－47)、四王子旗白音朝克図から北東に分岐する長城の内、阿巴嘎旗内の部分でも壕・墻は二重であるという(賈1979p. 370)。その他の地域では確認されている限りでは壕・墻は一重である。

壕の規模については流れ込んだ土砂で埋没しているため、正確に知ることはできないが、現状では幅2～6 mを測るのみである(賈1979p. 370)。主墻(外墻)には馬蹄形もしくは半円形の馬面が築かれ、その間隔は林西県内で200～250 m、克什克騰旗内で140～190 m、正藍旗～太朴寺旗間で200～250 m、化徳県内で150～200 mを測り(李2001pp. 43－47)、概ね馬面は100～200 m間隔で築かれている。

筆者は1999年に遼上京の北に位置する赤峰市巴林右旗管内の慶州城付近において金代長城を観察することができた(写真7)。長城の主墻のみが確認でき、その幅は約10 m、高さ2～3 mほどであったが、版築状であったかは明らかではない。また主墻の北側には壕の痕跡は見あたらなかった。

写真7　慶州城付近の金代長城

長城の南側(内側)には付属する辺堡とさ

表３　金代長城の辺堡と城址

№.	名称	プラン	規模	備考
1	東部辺堡列（19 基）	方形	毎辺約 150 m	長城より 100 ～ 200 m、約 10km 間隔
2	諾敏河古城	長方形	東墻 240、西墻 220、南墻 370、北墻 380 m	各城址間約 70km
3	阿倫河古城	長方形	東墻 250、西墻 260、南墻 400、北墻 400 m	
4	雅魯･済沁河古城	長方形	南北墻 440、東西墻 240 m	
5	吐列毛都辺堡（2 基）	方形	毎辺 200 m	2 基、長城より約 200 m、200 m間隔
		長方形	東西 120 m、南北 110 m	
	吐列毛都古城　1 号	長方形	東墻 703、西墻 682、南墻 504、北墻 493 m	2 号の東 160 m、辺堡列の東 7km
	2 号	長方形	東西 320 m、南北 385 m	

1 ～ 4(黒龍江博物館 1961) 5(張 1982)

らにその背後には大型城が配置される。辺堡の平面形は正方形を呈し、毎辺 100 m前後を測り、10 ～ 20km 間隔で並ぶとされる (賈 1979p．370)。長城西部各所では辺堡と大型城の存在が確認されているものの散発的であるが (李 2001pp．43 – 47)、当然この他に未発見や消失したものもあり、西部各所の事例をもって金代長城の防御能力について判断することはできない。だが長城東部の尼爾基～碾子山間の長城及び辺堡、大型城については遺存状態が良好なこともあり、黒龍江博物館によって詳細な調査が行われ (黒龍江博物館 1961pp．251 – 258)、この調査結果からは長城･辺堡･大型城の配置状況や防御体制などについて知ることができる。

調査報告に基づいて長城･辺堡･大型城の配置を再構成すると図５と表３になる。まず長城の壕と墻は長年の風雪により高さと深さを減じているが高低差は 1.5 ～ 3 mを測る。そして辺堡が長城の東南 (内側) 約 100 ～ 200 m、北東－南西方向に約 10km 間隔で長城に沿って 19 基並ぶ。辺堡の平面形は全て毎辺約 150 mの正方形を呈し、長城とは反対の面に一門が開けられる。この辺堡列のさらに東南には３基の大型城が約 70km 間隔で長城や辺堡列と同方向に並ぶ。平面形はいずれも長方形であり、南城壁中央部に門が設けられている。規模をまとめると表３－２～４のようになるが、辺堡列からの距離は諾敏河古城 (図５－2) で約 10km、阿倫河古城 (図５－3) で約 3.5km、雅魯･済沁河古城 (図５－4) で約 13km を測る。この尼爾基～碾子山間の長城は金代行政区名称から東北路長城と呼ばれる。

同様な長城･辺堡･大型城の配置は霍林郭勒市吐列毛都においても見られる (張 1982pp．35 – 43)；(表３－5)。長城の東約 200 mに毎辺 200 mの正方形の辺堡２基が 200 mをおいて長城に沿って並び、門はともに長城とは反対方向の東向きに造られている。この２辺堡の南西約 2km にさらに長方形の辺堡がもう１基存在する。これら辺堡のさらに東約 7km には大型城２基が存在する。城間は約 160 mを測り、２号城が先に造られ、その廃絶後に連続して１号城が造られたことが出土遺物から確認されている。

尼爾基～碾子山間と霍林郭勒市吐列毛都の長城・辺堡・大型城位置関係や規模が類似することから、両事例に見られる形態が金代長城の基本的な構造であり、付属する辺堡・大型城を含めた構成であったと考えられる。つまり長城は二重の壕と墻からなり、その内側には 10km 間隔で辺堡が並び、さらにその背後には大型城が等間隔で並ぶという非常に強固な防御体制を確立しており、そこからは長城の一線をもって絶対的に北方からの侵入を阻止するという極めて強い意志さえ感じられるのである。

こうした長城に対する執着と期待の高さは『金史』に見られる長城建設に関する記述の多さからも

窺われる。まず『金史　地理志』に短いものであるが、長城創建にまつわる記述がある。
「…右施入泰州婆盧火所浚界壕而西…」『金史　地理志上』
金の四界の内、北界の西側部分では泰州において婆盧火が界壕 (長城) を築いたとする内容である。婆盧火が泰州に入ったのは『金史　婆盧火伝』によると天輔 5(1121) 年に諸路の猛安中の萬余家を率いて泰州に屯田した時であり、泰州は現在の吉林省白城市の南東約 25km に位置する。さらに婆盧火は天眷元 (1138) 年に烏骨・迪烈地に進駐してそこで没していることから、長城の着工が天輔 5(1121) 年から天眷元 (1138) 年間であることがわかり、しかも長城建設が烏骨・迪烈の進入に備えてのものであることが予測される。烏骨・迪烈は言うまでもなく遼代の烏古・敵烈のことである。

金初、烏骨・迪烈は海拉爾河の支流である免渡河上流の烏納河と嫩河西岸に居たとされる (景 1980p．94)。嫩河の西側にはすぐに大興安嶺が迫り、烏納河は大興安嶺の東側に位置することから、金初の烏骨・迪烈は大興安嶺の東西に広がる草原地帯に居たことになる。大興安嶺東側の直下には山脈に沿うように東北路長城が存在し、また地理的に泰州と近いことから、婆盧火が天輔 5(1221) 年から天眷元 (1138) 年にかけて入植し長城を建設した烏骨・迪烈地がこの地域であったことは間違いないであろう。

遼代の烏古・敵烈は遼初に行なわれた契丹の入植によって、遼代長城以北に追いやられていだが、遼の滅亡により南下を遮る要素がなくなったことから、金初には大興安嶺西側に広がるホロンバイル草原にまで南下し、さらに大興安嶺を超えて、さらなる南下の機会を覗っていたのである。東北路長城は大興安嶺東側に築かれていることから、大興安嶺を越えて南下する烏骨・迪烈に備えてのものであったことは明らかである。烏骨・迪烈が大興安嶺を越えて侵入するルートは大興安嶺内を南北に流れる雅魯河、綽爾河、洮儿河、帰流河沿いを進むルートが想定されている (張 1988p．81)。これら河川沿いのルートはいずれもモンゴル高原と直結しており、筆者はその中でも烏納河の南に位置し、水系を同じくする雅魯河沿いルートが有力であると考える。

このように金代長城は長大な規模の内、まず東端の東北路長城から建設が始まり、次第に西側部分が順次建設されていく。その様子を年代順に追っていくと以下のようになる。

大定 5(1165) 年　移剌按荅が泰州と臨潢路の接界に辺堡七十を築き、兵一万三千を駐屯させる。
『金史　移剌按荅伝』『金史　世宗上』

大定 21(1181) 年　3 月、世宗が泰州十九堡と臨潢路二十四堡について蒲察張家奴らを遣わして処置させる。ここで泰州内では達里帯石堡子から鶴五河間、臨潢路内では鶴五河堡子から撒里乃間の堡戍が直列に配置された。
4 月、奚胡失海は壕塹が沙雪のため堙塞して防御に耐えないことを報告し、さらに二百五十堡を構築し、撒里乃以西の戍軍舎を増強するよう提案した。
『金史　地理志上』

明昌 4(1193) 年　僕散揆が九百里にわたって築壘穿塹する。　『金史　僕散揆伝』

明昌間 (1190 ～ 95)　西南路、西北路、臨潢、泰州の間に築壕して大兵を備える。
『金史　張万公伝』

承安 3(1198) 年　完顔襄が歩卒を用いて穿壕築障し、臨潢路の左界から北京路を阻塞する。
『金史　内族襄伝』

承安 5(1200) 年　坦舌から胡烈公の六百里において辺堡墻隍が修完した。　『金史　章宗三』

特に承安 3(1198) 年に完顔襄による北京路長城は林西県凌家営子から豊寧県森吉図間の約 400km(図 1 － A)、承安 5(1200) 年に修完した西北路長城は豊寧県森吉図から商都県馮家村間の約 300km(

図１－B)、明昌 4(1193) 年の僕散揆による西南路長城は商都県馮家村から武川県上廟溝間の 365km(図１－C) に相当するとされ (李 2001p．49)、年代の経過とともに長城が西へ延長されていく様子がわかる。そして長城は『金史　地理志上』に見られる大定 21(1181) 年に東北路と臨潢路も含めてその基本形ができ、承安元～ 2(1196 ～ 97) 年に完成 (現在の形) に至ったとされる (黒龍江省博物館 1961pp．257 – 258)。

東北路長城が烏骨・迪烈 (烏古・敵烈) の侵入に備えて構築されたものであることは先述したが、西側の北京路、西北路、西南路長城は 12 世紀末に揃って造られていることから，このころ次第に勢力を増しつつあったモンゴルを意識しての構築であったことが推測される。この時期チンギス・カン (テムジン) は明昌 6(1195) 年にモンゴル高原に侵攻した金軍に協調してタタル部を攻撃したり、1196 年以降はケレイト部オン・ハンと同盟してモンゴルを含めた諸部族を次々と討ち、モンゴル高原を統一しつつあった (宮脇 2002pp．69 – 73)。承安 3(1198) 年に北京路長城を築いた完顔襄は明昌 6(1195) 年に行なわれた対タタル部侵攻で金軍の主将として参加し、共戦したモンゴル軍の実力をつぶさに見ており、その経験を長城建設に反映させたことが想像される。

金代長城は 12 世紀初めに東北路内に展開していた烏骨・迪烈 (烏古・敵烈) を大興安嶺の西側へ封じ込めることを目的として建設されたが、12 世紀末にモンゴルが台頭してくると順次長城を西へ延長することにより、モンゴルの侵入を防ごうとしていたのである。この約 80 年にわたる長城建設事業は金にとって相当の負担を強いられることになり、明昌年間 (1190 ～ 1195 年) には民の負担が著しいため、長城建設の見直しが建議され『金史　張万公伝』、また大定 17(1177) 年には過酷な自然環境のため屯田が破綻し兵士が疲弊しているため、その状況を立て直すよう世宗が強く命じている場面も見られることからも『金史　宗叙伝』、長城を主とした北辺への防備が金にとって常に重要な問題であり、その機能に重く依存・期待していたことがわかる。そのため遼代長城と異なり、複数列の壕墻を巡らし、尼爾基～碾子山間に見られるような重厚で高密度な辺堡と城の配置が生み出されたのであろう。

３. まとめ

以上が遼代長城と金代長城の経路・構造と歴史的背景である。特に両長城の構造を比較してみると遼と金における防御思想の違いが明らかになる。

遼代長城の壕と墻は一重であるが、金代長城では全線においてでないにしても複数列の壕と墻を有している。また長城に併設される辺堡の配置が遼代長城では散発的で特に規則性はないのに対して、金代長城では遼代のものに比べて辺堡の規模が大きく、しかも高い密度で並ぶ。さらに辺堡列の近接した背後 (南側) には等間隔で大型城も配置され、長城・辺堡・大型城が一体となって機能している。しかし遼代長城では金代長城のように長城や辺堡に近接して大型城が配備されていないが、その代わり長城の南 100km 以内に約 130km 間隔をもって北方の防備を担った州城や辺防諸城が東西に建ち並んでいる。

この両長城の構造から起想される基本的な防衛構想は、遼代長城は北方民族の侵入を長城と辺堡によって察知し、一時的に足止めを試み、その侵入速度を鈍らせて時間を稼ぐ。その間に南に展開する州城や辺防諸城に急報し、侵入した北方民族が州城や辺防諸城に達するまでに準備を整え、その諸城をもって迎撃する。それには長城から 100km 以内の距離が適切であったのであろう。つまり遼代長城は哨戒線と南方の辺防城の迎撃準備が整うまでの時間稼ぎを主な役割としており、究極的には破られることを前提にして造られたものとすることができる。長城から辺防城列に至る空間は軍事的緩衝

地帯として存在し、そして海拉爾河とヘルレン河沿いに東西に並んだ諸城が最終的な防衛ラインを形成するのである。であるからこそ『遼史　地理志』の冒頭に記されている遼の四界の内、北界が辺防諸城の立ち並ぶ「臚朐河」と記されているのである。一方金代長城は長城・辺堡・大型城によって遼代長城と比較してはるかに完成度の高い堅牢な防御線が形成されている。金代長城は北方からの侵入に対して、遼のように軍事的緩衝地帯を設定して防御の主体を最終防衛ラインを形成する後方の辺防諸城に託すのではなく、強固に築かれた長城・辺堡・大型城をもってそこを限りに絶対的に防衛したのである。こうした両長城の機能を含めた重要性や期待度を如実に表しているのが、『遼史』や『金史』中のそれぞれの長城に関する記述の多寡である。

『遼史』において直接長城に触れた記述は皆無であるが、それに対して『金史』中の金代長城に関する記述の多さは今まで述べてきたように比較にならないほど多い。それは北方からの激しい諸民族の侵入に対して長城を防衛の第一に据えて考えていた証拠であり、だからこそ皇帝自らが長城の機能不全について語調を強めて臣下を叱責したのである。遼代長城と金代長城は建設目的において、北方からの諸民族侵入を阻止することにおいては共通するが、実はその前提において破られることを予め考慮したものと絶対に破られてはいけないものと全く正反対の思想が根底にあったのである。こうした防衛に対する発想の違いが生じた原因を一概に述べることはできないが、その大きな要因の一つとして、それぞれの王朝を建てた基幹民族の民族性が大きく作用していることは間違いないであろう。草原の民である契丹と森林の民である女真の文化的相違点がその根底にあるのである。

注

1）チンギス・カン長城を遼代創建とする意見には景愛氏 (景 1982、1984)、白石典之氏 (白石 1994) のものがあり、一方金代創建説には賈洲傑氏 (賈 1979)、米文平・馮永謙氏 (米・馮 1990) の研究がある。なお収録書誌、巻、出版年は稿末の引用参考文献一覧を参照されたい (以下同じ)。

2）「辺堡」の用例は『金史　世宗上』、『金史　地理志上』、『金史　章宗三』に、「壕」は『金史　地理志上』などに見られる。

3）彭占傑氏は「 金代長城初論 」(彭 2001) において金界壕を機能的、歴史的観点から長城に定義づけしている。

4）遼代長城の経路と構造は景愛氏 (景 1982、1984)、D･マイダル氏 (マイダル･加藤 1988)、米文平･馮永謙氏 (米・馮 1990)、白石典之氏 (白石 1994) の調査・研究を基に再構成した。米・馮両氏は踏査したチンギス・カン長城を金代創建としているが、調査内容が詳細かつ信憑性が高いため使用した。

5）三宅俊彦氏のご教示による。

6）金代長城の経路と構造は黒龍江博物館 (黒龍江博物館 1961)、張柏忠氏 (張 1982)、李逸友氏 (李 2001) の調査・研究を基に再構成した。

引用参考文献

王永祥･王宏北　1988 「黒龍江金代古城述略」『遼海文物学刊』2

景愛　1980 「関于金代蒲与路的考察」『文史』10

景愛　1982 「関于呼倫貝爾古辺壕的時代」『社会科学戦線』1

景愛　1983 「関于呼倫貝爾古辺壕的探索」『歴史地理』3

項春松　1996 『遼代歴史与考古』

黒龍江博物館　1961 「金東北路界壕辺堡調査」『考古』5
賈洲傑　1979 「金代長城初議」『中国蒙古史学会成立大会紀年集刊』
白石典之　1994 「モンゴル部族の自立と成長の契機」『新潟大学人文科学研究』第 86 輯
張柏忠　1982 「吐列毛杜古城調査試掘報告」『文物』7
張柏忠　1988 「遼代泰州考」『北方文物』1
陳得芝　1985 「遼代的西北路招討司」『宋遼金史論集』1
津田左右吉　1916 「遼代烏古敵烈考」『満鮮地理歴史研究報告』第二
鄭隆　1961 「内蒙古扎賚諾爾発現一座古城」『考古』11
彭占傑　2001 「 金代長城初論 」『遼金史論集』第 6 輯
宮脇淳子　2002 『モンゴルの歴史』
米文平・馮永謙　1990 「嶺北長城考」『遼海文物学刊』1
D･マイダル著、加藤九祚訳　1988 『草原の国モンゴル』
李逸友　2001 「中国北方長城考述」『内蒙古文物考古』1
李錫厚　1993 「遼朝的辺防」『中国辺疆史地研究』2
劉鳳翥･干志耿･孫進己　1979 「遼朝北界考」『北方論叢』5
林栄貴　1995 『遼朝経営与開発北疆』

金 代 の 銭 貨 流 通

三宅　俊彦

1．はじめに

筆者はこれまで、宋代から明代にかけての中国を中心とした東アジアにおける銭貨流通に関し、いくつかの論考を発表してきた（三宅 2000,2003,2004 など）。その中で中心にあつかってきたのは、窖蔵銭と呼ばれる一括して大量に埋められた銭貨である。東アジアにおいて窖蔵銭が発見されているのは中国と日本であるが、中でも銭貨を自ら鋳造していた中国の窖蔵銭を分析することは重要であり、当時の銭貨流通の復原には欠かせない資料となる。

このような分析を経て明らかにされた中国の窖蔵銭は、同時にその周辺地域から出土する銭貨を流通の中に位置づける際にも、基礎資料として非常に有効である。筆者は試みとして、モンゴルから出土する銭貨を中国の窖蔵銭と比較検討したことがある。その結果、市場経済が営まれていた都市遺跡や土城などでは中国の銭貨流通の影響下にあったことが明らかとなり、さらに皇帝の居住する宮殿やチンギス・カンを祀った霊廟などから出土する銭貨はまったく異なる様相を呈することが分かった（三宅 2003）。

この様に、中国の窖蔵銭の分析は、窖蔵銭の発見されていない地域の銭貨流通の状況を復元する際にも、基礎資料としての活用が可能であり、かつ有効なのである。本論考では、金代の銭貨流通の復元を試みるが、ここでも窖蔵銭のデータを基礎資料として利用する。そして沿海州地域から出土する銭貨との比較をおこない、それらを銭貨流通の中に位置づけてみたい。合わせて、金国内の銭貨流通をひとつのモデルとして、東アジアにおける銭貨流通の基本的な概念図を提示したいと考えている。

2．金代の出土銭の事例

（1）窖蔵銭

まず、金代の出土銭の事例を概観しておきたい。最初に、基礎資料となる窖蔵銭の事例を見てみよう。金の窖蔵銭は、筆者が集成したものは 65 ヶ所 98 事例である（三宅 2004）。それらは吉林省以南の中国北部から集中して発見されている（図 1 の●）。これらの地域は当時非常に貨幣経済が発達していた地域と見ることができよう。

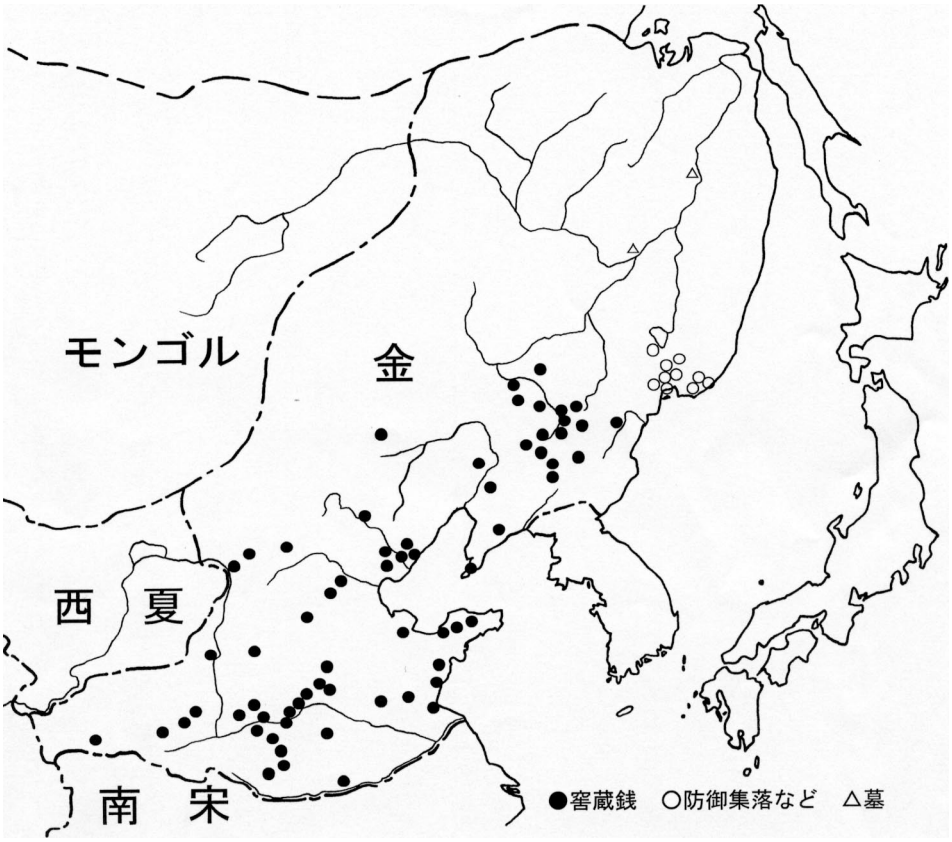

図1　金の出土銭

特に靖康の変（1127 年）により北宋を滅ぼし、領

有することとなった淮河以北の地域は北宋の旧領土の北半を占めており、貨幣経済が非常に発達した地域である。金が領有した後も、この地域に居住する漢人たちを中心として、停滞することなく銭貨流通がおこなわれていたことが読み取れる。また、金の版図から見ればこれらの地域は南半に偏っており、金の北半では窖蔵銭が発見されていない。このことから、金国内において銭貨流通は全国的規模でおこなわれたのではなく、銭貨の流通量には地域的な差異が存在したことが読み取れる。

（２）防御集落

次に沿海州の事例を見てみよう。この地域の出土銭を集成したものに、枡本哲氏の論考がある（枡本 1995)。枡本氏の集成によれば、この地域では防御集落を中心として、13 ヶ所の遺跡から銭貨が出土している。またそれらを集計した表には、マモート氏による沿海州・満州地域から出土した銭貨の集計も掲載されている。

沿海州では、防御集落から銭貨が出土する点が、大きな特徴と言えるであろう。これは、当時これらの防御集落に駐屯していた人々が、銭貨を必要としていたことを示している。また同時に、窖蔵銭が見られないことから、銭貨流通が金の南半に比べそれほど浸透していなかったことも読み取れる。

（３）アムール川流域

アムール川流域は、金の領域では最北部に位置する。この地域の出土銭についても枡本氏の集成を参照したい。この地域の出土銭で、確実に金代に属する事例は、ボロニ湖畔第２号墓とナデジンスコエ村近傍の女真文化の墓である。この他にも枡本氏の集計表にはボリショイ・ドゥラル渓谷第１号住居跡、サカチ・アリャン村、ハバロフスク酒樽工場、ツングースカ川河口集落で銭貨の出土が報告されているが、詳細は不明である。

この地域の出土銭は、墓に副葬されている点が特徴である。また住居跡からの出土も見られるが、詳細は不明である。出土量は、ほとんどが１枚から数枚程度と非常に少なく、この地域では銭貨がほとんど流通していなかったことが分かる。

３．銭貨流通の比較検討

１）窖蔵銭と防御集落出土銭の銭種組成

ここでは、銭貨流通の状況を探るため、もっとも貨幣経済の発達した金の南半に見られる窖蔵銭と、沿海州の防御集落を中心に出土している銭貨について検討する。それぞれの地域で、どの様な銭種がどのような割合で流通していたか比較し、そこから銭貨流通の実態を復元してみよう（表１）[1)]。

金の窖蔵銭の中で、銭種と数量を報告しているものは 14 遺跡あり、特殊な事例である１遺跡を除いた数値を利用する。詳しい分析は拙著（『中国の埋められた銭貨』2005　同成社）でおこなっているので、そちらを参照していただきたい。

金の窖蔵銭の特徴をまとめると、北宋銭の比率が最も高く、全体の 90.35％を占める。次いで、唐・開元通寶が全体の 7.63％を占め、この両者で全体の 98％に達する。また金が自国で鋳造した銭貨の比率は非常に低く、全体の 0.77％にしか過ぎない。

沿海州の防御集落出土銭の事例は、枡本氏の集成した表を参照したい。この表の中で、種類と枚数を示しているものを資料として使用する。なお、この表には沿海州だけでなく、マモート氏が 1954 年以前に集成した中国東北部の資料も含まれている。これらをまとめたものが、表１の中央である。総計 928 枚あり、開元通寶１枚と大定通寶６枚を除き、他はすべて北宋銭である。

この両者の銭貨流通の状況を検討するためには、それぞれに含まれる銭貨の種類とその割合を比較することが有効である。今、比較のために使用する窖蔵銭の資料は総計 412,170 枚に達する。一方の沿海州の防御集落出土銭は、わずか 928 枚である。この様な比較をおこなう場合、できれば 1 万枚以上の資料が欲しいところであるが、現状では望めないため、現今の資料を使用する。数量が少ないとは言え千枚近くあり、ある程度の傾向はつかめると考える。

これらの出土銭の中から、窖蔵銭において高い割合を示す 18 種類の銭貨を抽出し、その割合を沿海州の出土銭と比較してみたい。その結果を示したものが図 2 である。この図によれば、両者の間には明らかに相関関係が認められる。例えば祥符元寳・皇宋通寳・元豊通寳が両者とも多く、その割合もかなり似通っている。それ以外の銭種でも、グラフの曲線はかなり似ており、両者に含まれる銭貨の割合がかなり近いことが読み取れる。例外は開元通寳であり、沿海州の防御集落出土銭では 1 枚し

銭貨銘	安陽小学	
	小平銭	大銭
前漢・半両	1	
貨泉	4	
開元通寳	1760	
乾元重寳	105	
周元通寳	10	
乾徳元寳	2	
唐国通寳	31	
宋元通寳	91	
太平通寳	215	
淳化元寳	174	
至道元寳	311	
咸平元寳	420	
景徳元寳	527	
祥符元寳	762	
祥符通寳	388	
天禧通寳	516	
天聖元寳	738	
明道元寳	87	
景祐元寳	187	
皇宋通寳	1250	
慶歴重寳	10	
至和元寳	141	
至和通寳	34	
嘉祐元寳	125	
嘉祐通寳	273	
治平元寳	273	
治平通寳	39	
熙寧元寳	1234	
熙寧重寳		343
元豊通寳	551	566
元祐通寳	930	110
紹聖元寳	355	25
紹聖通寳	1	
元符通寳	158	20
聖宋元寳	226	81
崇寧通寳		564
大観通寳	133	
政和通寳	354	137
宣和通寳	39	130
建炎通寳	3	28
紹興元寳		41
紹興通寳		4
乾道元寳	2	
正隆元寳	170	
大定通寳	2	
合計	12632	2049
総合計	14681	
大銭の%	13.96%	

金の窖蔵銭

銭貨銘	沿海州	
	小平銭	大銭
開元通寳	1	
宋元通寳	5	
太平通寳	6	
淳化元寳	12	
至道元寳	10	
咸平元寳	29	
景徳元寳	27	
祥符元寳	58	
祥符通寳	16	
天禧通寳	5	
天聖元寳	38	
明道元寳	5	
景祐元寳	12	
皇宋通寳	87	
慶歴重寳		1
至和元寳	3	
嘉祐元寳	17	
嘉祐通寳	24	
治平元寳	30	
治平通寳	3	
熙寧元寳	78	
熙寧重寳		13
元豊通寳	151	*
元祐通寳	67	*
紹聖元寳	24	*
元符通寳	21	*
聖宋元寳	46	*
崇寧通寳	14	*
崇寧重寳		78
大観通寳	11	*
政和通寳	20	*
宣和通寳	10	*
大定通寳	6	
合計	836	92
総合計	928	
大銭の%	9.91%＋α	

集落（沿海州・中国東北部）

銭貨銘	豊楽橋北100m	
	小平銭	大銭
前漢・半両	1	
前漢・五銖	4	
貨泉	4	
後漢・五銖	8	
西魏・五銖	2	
開元通寳	859	
乾元重寳	36	
会昌・開元	19	
漢元通寳	1	
周元通寳	5	
乾徳元寳	1	
光天元寳	1	
咸康元寳	1	
唐国通寳	9	
南唐・開元	5	
宋元通寳	27	
太平通寳	85	
淳化元寳	86	
至道元寳	181	
咸平元寳	204	
景徳元寳	254	
祥符元寳	521	
祥符通寳	*	
天禧通寳	271	
天聖元寳	574	
明道元寳	86	
景祐元寳	223	
皇宋通寳	1321	
慶歴重寳		8
至和元寳	134	
至和通寳	*	
嘉祐元寳	389	
嘉祐通寳	*	
治平元寳	250	
治平通寳	*	
熙寧元寳	1136	
熙寧重寳		379
元豊通寳	1371	591
元祐通寳	1130	169
紹聖元寳	449	64
元符通寳	168	38
聖宋元寳	439	118
崇寧通寳		28
崇寧重寳		*
大観通寳	181	1
政和通寳	85	287
宣和通寳	55	287
靖康元寳		3
建炎通寳		29
合計	10576	2002
総合計	12578	
大銭の%	15.92%	

南宋の窖蔵銭

表１　銭種の比較

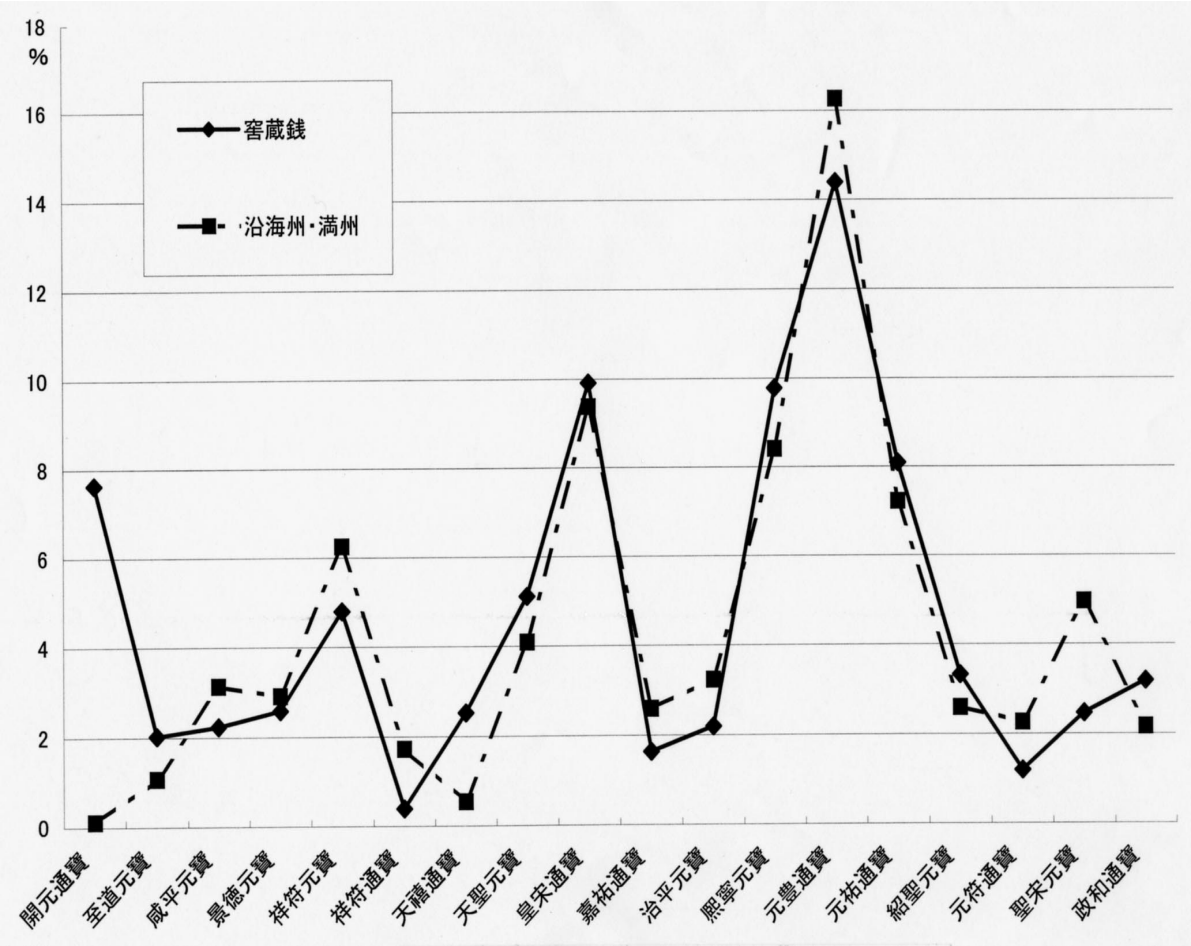

図２　窖蔵銭と集落の銭種構成（桝本 1995、三宅 2004 により作成）

か確認されていない。これがどの様な理由によるものか、今のところ不明である。今後資料の増加を待って、再検討したい。

以上の比較の結果から、両者は非常に似通った銭種組成であったことが明らかとなった。このことは、金の南半の貨幣流通のもっとも発達した地域と、沿海州の防御集落との間には銭貨の流通が恒常的におこなわれていたことを示している。つまり、沿海州の防御集落に駐屯した人々は、金の南半における流通経済の影響下にあって、決済手段として日常的に銭貨を使用していたのである。

２）大銭から探る北海道への銭貨流入

次に大銭（折二、当十などの大型銭）の発見状況から、北海道への銭貨流入のルートについて検討したい。

日本の一括出土銭では、大銭が意図的に排除され、小平銭（一文銭）のみが流通していた。東野治之氏は、北海道函館市志海苔で発見された一括出土銭の中に、熙寧重寳（当十）の周囲を削って小平銭と同じ大きさにしたものがあることを紹介し、「輸入された大銭を貨幣として使おうとすれば、一文銭に作り直す必要があったことがわかる」としている（東野 1999）。

日本で大銭が比較的多く流通していたのは九州・沖縄地域である。小畑弘己氏によれば日本の一括出土銭に含まれる大銭は 0.1％に過ぎないが、一般の遺跡から出土する銭貨では博多で 0.78％、沖縄で 1.13％が大銭であるという。このことから小畑氏は「（九州・沖縄）は、中国を中心にした環東アジア貿易圏のうちにあり、その内部貨幣としての銭貨流通システムに取り込まれていたと結論づけら

れる」としている（小畑 1997）。

日本において大銭が多く発見されているもうひとつの地域は、東北北部・北海道である。鈴木信氏は、アイヌ民族にもたらされた銭貨は和人との交易でもたらされる場合がほとんどであるとしながらも、東北北部・北海道で大銭が発見されていることに注目し、その入手経路について「沿海州やアムール川中下流域経路の存在を示唆する」としている（鈴木 2003）。

この鈴木氏の説く沿海州・アムール川流域からの流入ルートを検討するためには、金代の銭貨を検討する必要があるだろう。鈴木氏の説は、大銭が北海道から発見されていることが根拠のひとつであり、枡本氏の論考（枡本 1995）を引いて「女真文化では大銭が好まれる傾向があるといえるではないか」と考えている。では、実際に女真（金）文化では大銭が好まれていたのであろうか。以下に見ていこう。

まず、金においてもっとも銭貨流通の発達していた南半の事例を見てみたい。この地域で発見されている窖蔵銭で、大銭の数量を報告しているものは河北省・安陽小学の事例がある（馬 1994）。この事例では、銭種の判明した 14,681 枚（出土総数は 18,287 枚）の銭貨について各種類の枚数を報告している。この中で大銭の占める割合は 2,049 枚で、全体の 13.96％であった（表 1 左）。このことから、金の窖蔵銭では約 14％が大銭であったことが明らかとなる。

次に、北海道への銭貨流入の候補地のひとつである、沿海州の事例を見てみよう。ここでも枡本氏の集成（枡本 1995）を利用させていただく。沿海州（中国東北部も含む）で発見されている銭貨は総計 928 枚であるが、銭貨銘から大銭と分かるものは 92 枚である。これは全体の 9.91％を占め、沿海州では少なくとも約 10％が大銭であった（表 1 中央）。この数字は、窖蔵銭（安陽小学）の事例とくらべ 4 ％ほど低いが、これは明らかに大銭であることが分かった事例のみを示しているためである。枡本氏の論考に載せられている拓本を参照すると、この他にも元豊通寶・元祐通寶・紹聖元寶・元符通寶・聖宋元寶・崇寧通寶・大観通寶・政和通寶・宣和通寶にも大銭があることが明確であるが、それらは具体的な数量が不明のためカウントできなかった（表 1 中央の＊）。もしそれらの数量が分かれば、大銭の割合はさらに増加することは間違いなく、おそらく窖蔵銭の事例の 14％に近い数値になると推測される。

この様に、金における大銭の割合は日本に比べて非常に高く、窖蔵銭で 14％ほど、沿海州でも 10％以上であった。このことから鈴木氏の説くように、沿海州から北海道へ銭貨が流入した可能性は非常に高いと言える。

一方、同時に鈴木氏は「女真文化では大銭が好まれる傾向がある」と推測されているが、こちらの妥当性はどうであろうか。比較のために、金と同時期に中国南部にあった南宋の事例を見てみよう。南宋の窖蔵銭で大銭の割合を報告しているものには、浙江省杭州の豊楽橋北 100m で発見された事例がある（陳 1988）。銭種の判明した 12,578 枚（出土総数は 12,980 枚）の内、大銭の占める割合は 2,002 枚で、全体の 15.92％であった（表 1 右）[註 1]。

この南宋の約 16％という数値は、金の窖蔵銭の約 14％に近く、むしろ 2 ％ほど上回っている。このことから、金のみが大銭を好んだとは言えず、中国大陸全体において大銭は、ほぼ 10 数％の割合を占めていたことが分かる。つまり、中国においては王朝に関係なく似通った銭貨の流通状況であったと言えるであろう。

また、中国全体で大銭の流通量が 10 数％を占めていることは、九州・沖縄地域で発見される大銭を位置づける上でも注目される。小畑氏は前述のごとく、博多・沖縄で一般の遺跡から出土する大銭が、一括出土銭に含まれる大銭より高い割合を示すことから、これらの地域が「中国を中心にした環東アジア貿易圏のうちにあり、その内部貨幣としての銭貨流通システムに取り込まれていた」と考え

ている。しかし、日本でもっとも高い割合を示している沖縄でも 1.13.% であり、南宋の 15.92％などと比べてきわめて低い数値に止まっている。このため筆者は「環東アジア貿易圏」を想定することは難しいと考える。本論考の主旨とはずれるのでこれ以上の議論は避けるが、九州・沖縄地域の大銭の位置づけは、再検討する必要があろう。

なお、鈴木氏の想定している北海道への大銭の流入ルートのひとつにアムール川中下流域があるが、この地域は枡本氏の集成では銭貨の発見例が非常に少なく、また墓への副葬や住居からの数枚の出土に限られている。北海道で発見される銭貨の出土例に比べても非常に少なく、このアムール川中下流域は銭貨流入ルートとしての可能性は低いであろう。

以上の検討結果をまとめると、次のようになる。すなわち、北海道への銭貨流入は和人との交易によるものがほとんどを占めていたが、大銭の出土事例により大陸からの流入ルートも想定する必要がある。そして、もっとも可能性の高い流入ルートは沿海州である。

４．東アジアの銭貨流通

（１）銭貨流通の概念図

これまでの金国内の出土銭の検討から、銭貨の流通量は地域によって多寡があり、いくつかの地域に区分できることが明らかとなった。この金の銭貨流通状況をモデルとして、銭貨流通の概念図を提示してみたい。この概念図は、金国内のみの銭貨流通を表現したものではなく、中世の東アジアにおいて普遍的に適用可能なものであると考える。

東アジアでは、銭貨が均等に流通していたわけではなく、銭貨流通の中心地であった中国本土を離れるほど流通量は少なくなる。そして、それと並行するように「決済手段としての貨幣」という意味合いが徐々に失われ、墓への副葬や装飾品に利用するなど、決済手段以外の要素が大きくなってくる。

もちろん、銭貨流通の盛んな地域にあっても墓への副葬や装飾品、あるいは「まじない」などの呪術的な要素が銭貨に付与されることは多い。しかし、銭貨におけるもっとも重要な要素は、決済手段であったことは論をまたない。この「決済手段」という点に重点をおいて概念図を作成すれば、図３のようになるであろう。この図では、銭貨流通状況にレベルⅠからⅢまでの段階（地域）を設定した。それぞれ見ていきたい。

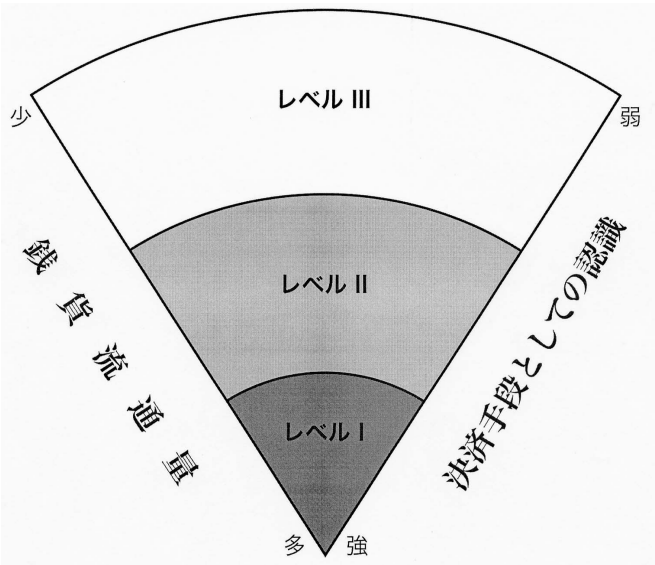

図３　東アジアの銭貨流通概念図

レベルⅠ

レベルⅠは、銭貨流通のもっとも盛んな地域を示す。銭貨は決済手段として、日々の生活の中で欠くことのできない重要な位置を占めている。そして大量に流通し、財産としての意味合いも持ち、緊急の場合は窖蔵銭として地中に埋めてまでも、その価値を保とうとした。言い換えるなら、窖蔵銭の作られた地域が、レベルⅠの範囲であるとも言えよう。

中国の例で言うなら、北宋と南宋の領域がこれにあたる。北宋・南宋とも、国土の全域で銭貨が流通し、窖蔵銭が作られている。一方、遼や金では、窖蔵銭の分布に偏りがある。領域の

拡大により領有した、中国北部地域や内蒙古東部、東北地方南部などには窖蔵銭があり、レベルⅠの地域と言える。しかし、モンゴル高原、黒竜江省、アムール川流域から沿海州にかけてなど、中国から遠い国土の北側では、窖蔵銭の分布が見られない。また、元（「大元ウルス」と呼ばれる範囲）でも窖蔵銭の分布は旧北宋・南宋地域のみであり、北方のモンゴル高原やシベリア、アムール川流域から沿海州にかけては、窖蔵銭が見られない。これらの地域は、レベルⅡあるいはレベルⅢの地域に属する。

すなわち、窖蔵銭の存在がこの地域のもっとも大きな特徴である。もちろん、窖蔵銭以外の都市・土城からの銭貨の出土もあり、墓への副葬、厭勝銭としての呪術的要素も広く見られる。

レベルⅡ

レベルⅡは、レベルⅠの周辺に位置する。この地域では、銭貨は一定数量が流通しているものの、その量はレベルⅠに比べ少ない。また流通している場所も、都城や大きな集落、交易場などに限られる。そのような場所に住んでいる官吏や軍隊、商人などにとって銭貨は重要な役割を持つが、それ以外の場所に住む人々にとっては日常生活において、銭貨は必ずしも必要不可欠なものではない。もちろん、何らかの形で銭貨が必要になる場合もあり、銭貨が「決済手段」として機能していることも認識していたであろう。しかし流通量が限られており、窖蔵銭などが作られるほどには、銭貨流通が浸透していない地域である。この様な地域は、遼や金あるいは元における、モンゴル高原や東北地方北部、また沿海州に見られる防御集落の多い地域などがこれにあたる。

レベルⅢ

レベルⅢは、もっとも周辺に位置する。この地域において銭貨は、「貨幣」としてはほとんど流通しておらず、「決済手段」としての機能もほとんど持たない。もちろん、銭貨の出土例はあるが、ほとんどが1枚から数枚程度であり、墓への副葬や装飾品などに用いられ、相対的に呪術的要素が強くなる。この様な地域は、遼・金・元のアムール川下流域、シベリアなどがこれにあたるであろう。

上記の三つの地域区分は、あくまで概念的な分類であり、各地域は実際には明確な線引きが行えるわけではなく、レベルⅠからレベルⅢへと微妙なグラデーション、あるいはモザイクをなして変化している。またある地域では、時期によってレベルの変化が起きていることもある。

たとえば、日本を例にとって見ると、自国で鋳造した古代銭貨（いわゆる「皇朝十二銭」）が廃れた後、銭貨の流通は衰退する（レベルⅢ）。そして、平安時代から鎌倉時代の初めに中国からの銭貨の流入が始まり（レベルⅡ）、鎌倉時代後期には一括出土銭（窖蔵銭）が作られるようになり、全国的に銭貨流通が浸透する（レベルⅠ）。

また、鈴木信氏よれば、北海道では道南の渡島半島において志海苔を始めとする一括出土銭が発見され（レベルⅠ）、その東の道央にある集落遺跡のいくつかからは銭貨がまとまって出土し（レベルⅡ）、アイヌ墓では銭貨が首飾りや装飾品、物入れの緒締めとして用いられる例があると言う（レベルⅢ）。またアイヌ民族は、和人との交易により銭貨を入手していたとも言い（レベルⅡ）、北海道ではレベルⅠからレベルⅢまで、モザイク状に複雑に入り組んだ様相を示している（鈴木 2003）。

なお、この概念図で示した東アジアの銭貨流通は、あくまで銭貨が「決済手段」として認識され流通していた地域の濃淡を、概念的に示したものであり、「経済圏」とは一致していないことを明言しておく。遼・金と北宋・南宋の間では銭貨の流通は禁止されており、日本と南宋の間でも同様である。そのため、たとえ同じレベルⅠに属するからと言って、ひとつの経済圏を形成していたのではない。

（2）金代の銭貨流通

この概念図に照らして、金代の銭貨流通をまとめておこう。

金においては、その南半で窖蔵銭が発見されている。この地域がレベルⅠに相当する。そして、防御集落などから銭貨の出土している沿海州は、レベルⅡにあたるであろう。さらに、アムール川流域では墓への副葬や一部の住居から出土するのみで、銭貨の流通量・決済手段としての認識とも、非常に低い。レベルⅢの地域と言えよう。

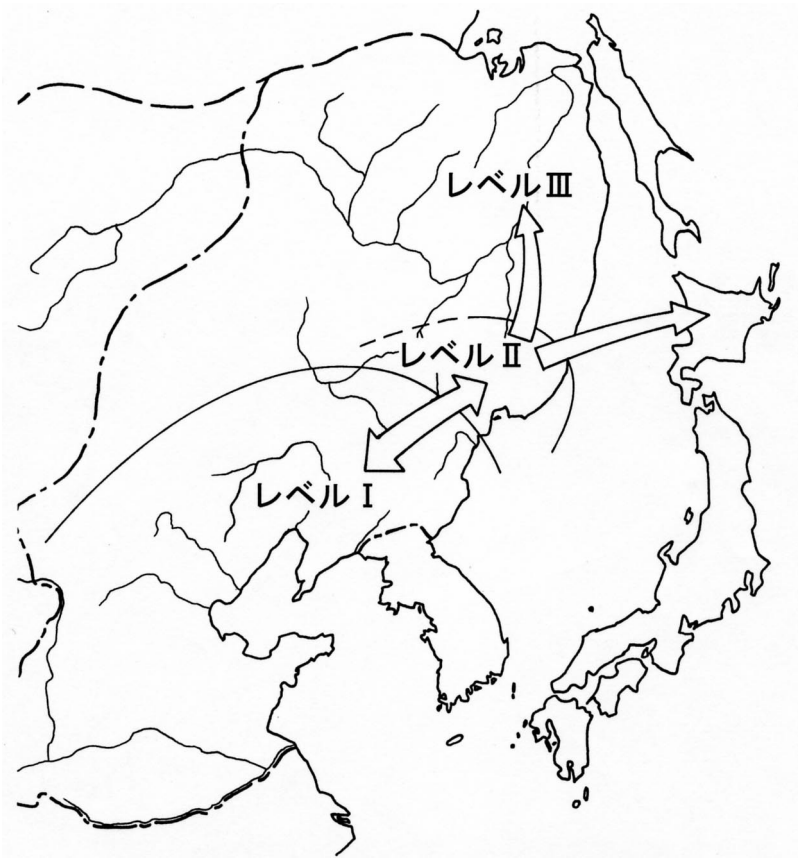

図4　金代の銭貨流通

この金代の銭貨流通を図に示すと図4のようになる。レベルⅠの窖蔵銭が見られる南半の地域と、レベルⅡの防御集落から銭貨の出土する地域では、本論考で検討したとおり銭種組成が非常に似通っており、また大銭の割合も近い。このことは、両者の間で銭貨流通が恒常的におこなわれていたことを示しており、沿海州の防御集落に駐屯した人々が、金の南半における流通経済の影響下で、決済手段として銭貨を使用していたことを意味する。

そして、レベルⅡの沿海州からレベルⅢのアムール川流域へと、銭貨の流通量は減少していく。アムール川流域では銭貨の発見例も少なく、決済手段としてより呪術的な要素が相対的に増加する。このことから、両者の間に日常的は銭貨流通がおこなわれていたとは考えにくく、レベルⅡからレベルⅢへという一方的な銭貨の流れが想定できよう。

また北海道との交流は、現時点では金とアイヌ民族との交易に際して銭貨が決済手段として重要な働きをしたとは想定しがたい。なぜなら、鈴木氏の研究によれば、金からもたらされたと考えられる大銭は、耳飾りなどに使用されているからである（鈴木 2003）。しかし、北海道の大銭の出土は明らかに大陸との交渉の結果であると言え、もっとも高い可能性があるのはレベルⅡの沿海州からの流入であろう。

5．まとめと課題

本論考では、金代の銭貨流通について検討した。まず、金国内で発見される出土銭の事例を概観し、南半で窖蔵銭が見られ、沿海州では防御集落から銭貨が出土し、アムール川流域では墓に副葬されていることが明らかにされた。

次に窖蔵銭と防御集落の銭貨を分析し、両者の銭種組成が非常に似通っていることから、両者の間で銭貨が恒常的に流通していたことを明らかにした。また大銭の分析から、北海道へ銭貨が流入した可能性が高いことを指摘した。

これらの分析から、金における銭貨の流通状況をモデルとして、東アジアにおける銭貨流通の概念図を提示した。この概念図では銭貨の決済手段としての認識をもとに、レベルⅠからレベルⅢまでの段階（地域）に分けられることを示した。

今後の課題としては、まず出土銭の事例をさらに多く収集し、データの精度を高めることが不可欠であろう。今回使用した事例では、アムール川流域や沿海州の出土銭のデータを枡本氏の集成によった。おそらく枡本氏の集成以後にも新発見が蓄積されているであろうし、未報告の発見例もあると思われる。それらのデータを収集して、より詳細に検討することで、さらに分析の精度が上がると期待される。また、中国国内の金の土城からも銭貨の出土は多く、それらのデータの収集も急がれる。

この様に、限られた資料の中での検討であったが、出土銭の分析により金代の銭貨流通について、大きな道筋は示せたのではないかと考えている。本論考が、中世の北東アジアにおける銭貨流通研究の一助になれば幸いである。

注

1)　表1右の＊は､「元寶と通寶（あるいは通寶と重寶）の総数をまとめて報告しているもの」である。そのため一方の項目には＊を、もう一方の項目にはその総数を示している。

参考文献

小畑弘己　1997　「出土銭にみる中世九州・沖縄の銭貨流通」『文学部論叢』第57号　熊本大学文学会

鈴木　信　2003　「北海道の中世出土銭」『出土銭貨』第19号

陳　　琿　1999　「杭州中河治理工程発現的宋代窖蔵銅銭清理報告」『中国銭幣』1988年第2期

東野治之　1999　『貨幣の日本史』朝日選書574（第2刷）　朝日新聞社

馬　　林　1994　「河北省順平県発現金代窖蔵銅銭幣」『文物春秋』1994年第4期

枡本　哲　1995　「北アジアの出土銭」『出土銭貨』第3号

三宅俊彦　2000　「唐・宋代の窖蔵銭」『博望』創刊号

2003　「モンゴル国アウラガ遺跡出土の銭貨」『出土銭貨』第19号

2004　「宋代窖蔵銭的初歩研究―兼論窖蔵銭的中日比較―」『中国歴史文物』2004年第3期

ノヴォポクロフカ２城址調査の成果

N.N. クラディン、Yu.G. ニキーチン
翻訳：木山克彦

原題：Некоторые результаты исследований городища Новопокровское-2，Традиционная культура Востока Азии выпуск третий，Благовещенск，2001 c.82－90

ノヴォポクロフカ２城址は、沿海州クラスノアルメイスキー地区、ノヴォポクロフカ村より北東に0.5㎞、イマン川左岸の岩立った山上に位置する。この城址は、ロシア沿海地方北部における中世期の考古学遺跡のうち最大のもので面積20.3haを測る。城址の最初の記載は19世紀末の、I.P. ナダロフによるものである[1)]。城域は、北と東はイマン川に面した切り立った崖によって、西・南側は強固な系統的な防御施設、内・外の城壁（土塁）、その間の壕、内側の土塁に築かれた14ヶ所の馬面と門によって防御されている（図１）。

外壁は城址の西側に設けられている。高さは0.5m、長さ約800 m、幅は上面で0.5 m、底面で１～2mである。

壕は外壁と内壁の間にあり、西側にのみ認められた。その深さは0.3～0.5m、長さは外壁と同様に約800mである。この他に、北西端から11番目と12番目の馬面の間に長さ50mの小規模な外壁がある。

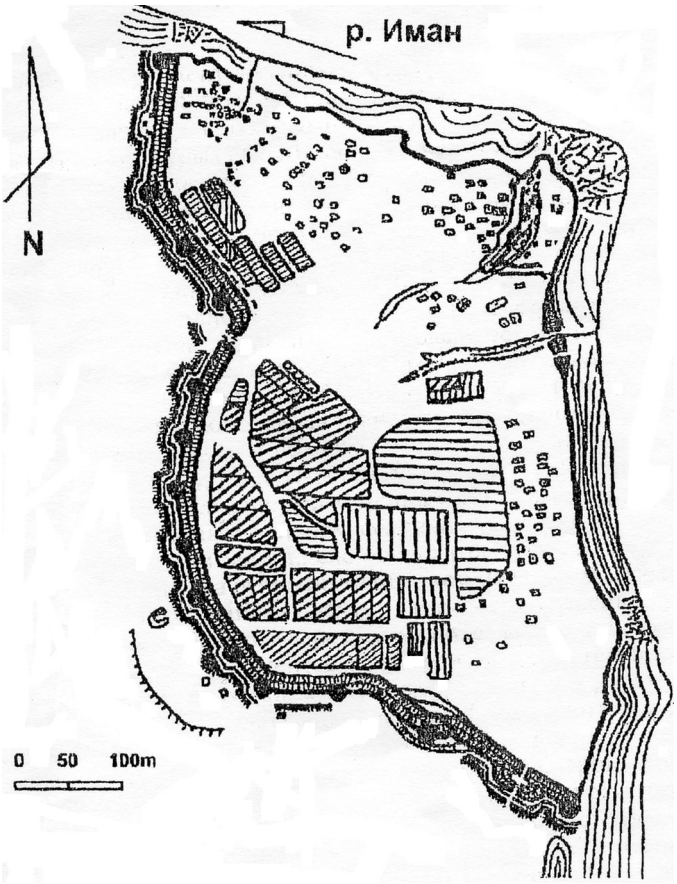

図１　ノヴォポクロフカ城址全体図

内壁（主城壁）は城址の南側と西側を防御している。その高さは場所によって異なり、外側は4.5～8m、内側は3.5～4mである。壁の幅は上面で1.5m、底面で少なくとも10～12 m。壁の周長は1.9kmである。北側と東側にも小規模な城壁が認められた。これらはおそらくは補助的な意味を持っていたものだろう。自然の起伏にほぼ対応しながら、城壁は岸の崖面に沿って３～５ｍの位置に築かれている。しっかり築かれた個所と、ほとんど認められない個所があり、その最大高は0.5m、幅は上面で0.5m、底面で１～2mである。この北側と東側には、城の防禦の為に、壁頂部に木の柵があったと思われる。城の東部分には、沢による自然の傾斜があり、川へ降りる利便性が確保されている。おそらく、そこには船着場があったのだろう。この地点の城壁はやや大きく、長さは70mである。現在、この城壁の中央には、1971年にトラクターによって開けられた決壊箇所がある。

城址の南側には“砲座”を保護する 14 の馬面と門がある。馬面は壁外側へ長方形状を呈する突出である。その規模は、ほぼ 6 × 5m で、その高さは基礎壁の外側と同様である。馬面と壁は礫で補強されている。

西側部分は、20 世紀第 3 四半期に、トラクターによって開けられた決壊箇所がある。現在この場所には、城内部にある畑地への道路が通っている。

城には人工的なテラスがあり、142 の落ち込みが確認できる。北東部の隆起した部分では、周長約 150 mの別の土塁がある。この土塁は不整形で、高さは 0.3 ～ 0.5 m、幅は上面で 0.3 ～ 0.5 m、底面でおよそ 1 ～ 1.5 m、城の北東部分を他の領域から区切っている。城壁の形状、住居の落ち込みが円形を呈すること、土塁内部の遺物から判断すると、この土塁はより古い時期に築かれたものと推定される。

城址内の文化層は、畑地の開墾、軍事施設（半壊したトーチカ、穴、塹壕、射撃壕等）やその他、2.5 × 3 m、深さ 0.5 ～ 1 mまでの長方形、方形の盗掘坑により、かなりの部分が破壊されている。

菜園と城西側の間に、菜園の開墾に際して、石製臼がひっくり返った状態で出土している。地元住民によれば、開墾時に、多くの灰色の陶質土器片、鏃、鉾（鉾 1 点はノヴォポクロフカ村の B.B. ボンダレンコから寄贈された）、貨幣、甲冑小札、青銅製鏡、鉄製刀が出土したという。聞き取り内容からは、これらの資料は全て沿海地方南部・中央部における 13 世紀（沿海地方における女真国家東夏：1215 ～ 1233 年）の遺跡の出土品の基本的な構成と類似していると言える。

城の境から門に至るところでは、土木作業の際、金属製の巻きびし（いわゆる“чеснок”）が出土している。1993 年、ウスリースク国立教育大学の学生、А．Л．メゼェンツェフが城の北東部分で、明るい釉薬のかかった土器片と宋銭（太平通宝）を見つけている。彼は、この資料の詳細な内容を論文で述べている [2)]。

資料の空間的分布をより正確に把握し、地元住民の及ぼした損害をよりはっきりさせるために、採集資料が集中する畑地を含め、城の領域を全面的に表面調査した。

その結果、口縁部、底部細片、隆帯を持つ頚部片、パクロフカ文化（11 ～ 13 世紀）に特徴的な標準的な櫛による沈線文様を持つ土器 18 片など、30 片以上の陶質土器を採集した。この他に青銅製鉸具、北宋銭（祥符通宝：1008 ～ 1016 年）が見つかった。

城内部の最初の発掘は 1965 年、Э．В．シャフクーノフによって行われた。彼は、防禦施設のプランを作成し、城北西隅の竪穴住居址の一つにかかる 9 × 1m のトレンチ発掘を行っている。この年の発掘報告で次のように述べている。「トレンチの層序に見るように、住居は小さく、その幅は 5.2m である。この住居の長さについては、横のトレンチが 1 本しかない為に、おおよそしか分からない。トレンチによって住居に炕の煙道の左右の曲がり目が存在する事が明らかとなっている。炕は細く、全ての事からして、П字形を呈しており、床面より幾らか高く、石の板を積上げて作っている。また、北の曲がり目の上にある石の集積の残りは悪く、炕上、そして床面上には白っぽいシルト層が堆積し、そして炕上のこの層は床面上よりかなり厚く堆積していた。白っぽいシルト層の形成には壁の補強が関連している。（中略）。この住居を横切るトレンチ発掘では、全部で、若干の陶質土器片、大量の土器片、土製紡錘車 1 点が見つかった。これらの遺物は全て住居の床面、底土と白っぽいシルト層の間に残されていた。築堤のくぼみから判断すれば、住居の出入り口は東側にあった」[3)]。

1998 ～ 1999 年、ロシア科学アカデミー極東支部、極東諸民族歴史考古民族研究所とウスリースク国立教育大学は、共同で沿海地方北部の考古学調査を行った。ノヴォポクロフカ 2 城址では、2 つの住居の落ち込みとこの遺跡の西側壁が調査された。住居の落ち込みのひとつは、地山を楕円形に掘

りこんで居住空間としている。調査区の発掘の過程で、中世の暖房設備建造の特殊な基礎が明らかとなったが、発掘ではこの時期の遺物はひとつも出土しなかった。

何らかの要因によって、住居の建造は仕上がらず、居住区は、周辺の川の切り立ちにある平坦なテラスから採掘された土で埋められた。この土には、かなり古い時期（新石器末〜青銅器時代に属すると思われる）の土器が多く含まれていた。

発掘した住居（Э．Ｂ．シャフクーノフの調査した住居に続き、連続して２号住居とする）は、城址の北部分、なだらかな傾斜を削って作った、北の壁から約 30m、イマン川の切り立った岸から 40m の人工のテラスに位置している。このテラスには、似たような形状に作られた住居跡が多数観察できる。

住居の落ち込みは、不整円形を呈し、長軸を３－Ｂラインに向けていた。落ち込みの地点に９×8m、72 ㎡の発掘区を設け、現地表面の水準測量を実施した。水準測量の結果、この地点は北に向けて傾斜している事が分かった。

発掘は、住居全体を覆う厚さ 10 〜 11 ㎝の表土を剥ぐ事から始めた。この作業時、表土層下部、Д４区で、鉄製車轄具が３片、Д５区では、灰色の陶質土器片が出土した。

表土を剥ぎ、清掃した後、次のような様子が明らかとなった。明褐色シルト層を基調とした中に、はっきりと暗褐色の住居落ち込みの覆土が明らかとなった（特にＢＧＤＥЖ４区、ＢＧＤＥЖ５区、ＢＧＤＥЖ６区でははっきりと観察できた）。発掘区南側部分では、落ち込みの覆土の色は中央部、北部とは異なっていた。ここでは、表土の下で赤味がかった褐色シルト層が観察された。これ以外では、Д３区、Ｅ３区で、礫と炭の集積が観察され、Ｚ３区では、炭の集積があった。炭と壁土の集中は、Ｂ４区、Ｂ５区で観察された。

更に 10 ㎝毎に分層した。第１層、第２層の発掘中、Б４区で鉄製かすがい、Б５区で鉄製釘、Ｅ４、Ｅ５区で鉄製Ｕ字金具２個、И４区で鋳造製鉄釜の上部片が出土した。第１層を剥いだ後、新たに清掃を行い、この過程で、次のような状況が明らかとなった。：Ｚ３区の炭化物の集中は、Ж３区の斑点状の炭化物分布まで広がっていた。И６区、Ｚ６区では炭化物分布は灰色でほぼ長方形を呈していた。И８区では、柱構造物のくぼみが検出された。И３、И４区では腐った木造の構造物の痕跡が見つかった。

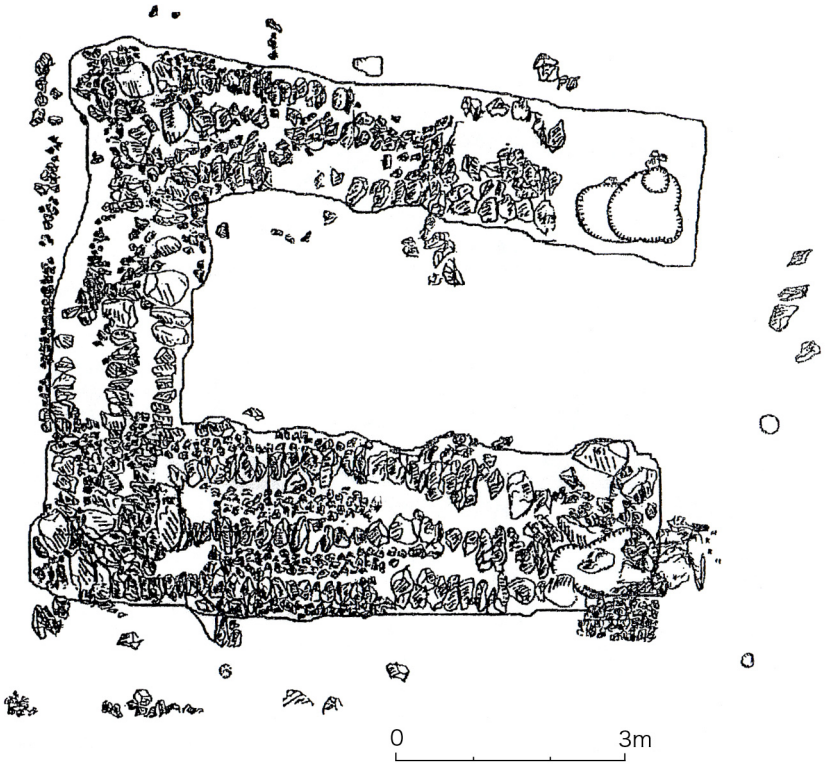

図２　住居址平面図

住居には、暖房施設の跡があった。左（住居で入り口に対して）・後方・右の３部分から成り、２つの炉と煙道を持つΠ字形の炕である（図 2）。炕の左右部分は３－Ｂの方向を向き長さ約 5m、後方部分は 8m で、いずれも幅約 2m である。炕の全体の面積は 25 ㎡

である。

住居の居住空間を準備する際に、炕の建造の為に特殊な基礎を残した。地山で貼床を作り、そこに後で煙道を空けている。そして、この煙道を幅広の礫で覆い、この礫間の隙間に細かな礫を積み上げる。同じように住居の隅も細かな礫が積み上げられている。

住居の暖房施設建造の調査により、炕は３条の煙道を持ち、その幅は 20 ～ 35 ㎝、深さ 12 ～ 15 ㎝、細かな木炭と黒色の煤を含む暗灰色シルト層が覆土として堆積していることが明らかとなった。

全体的に、炕の表面はどこでも住居床面より最大 30 ㎝ほど高い。また、炕の左側節は右側より 10 ㎝ほど高かった。

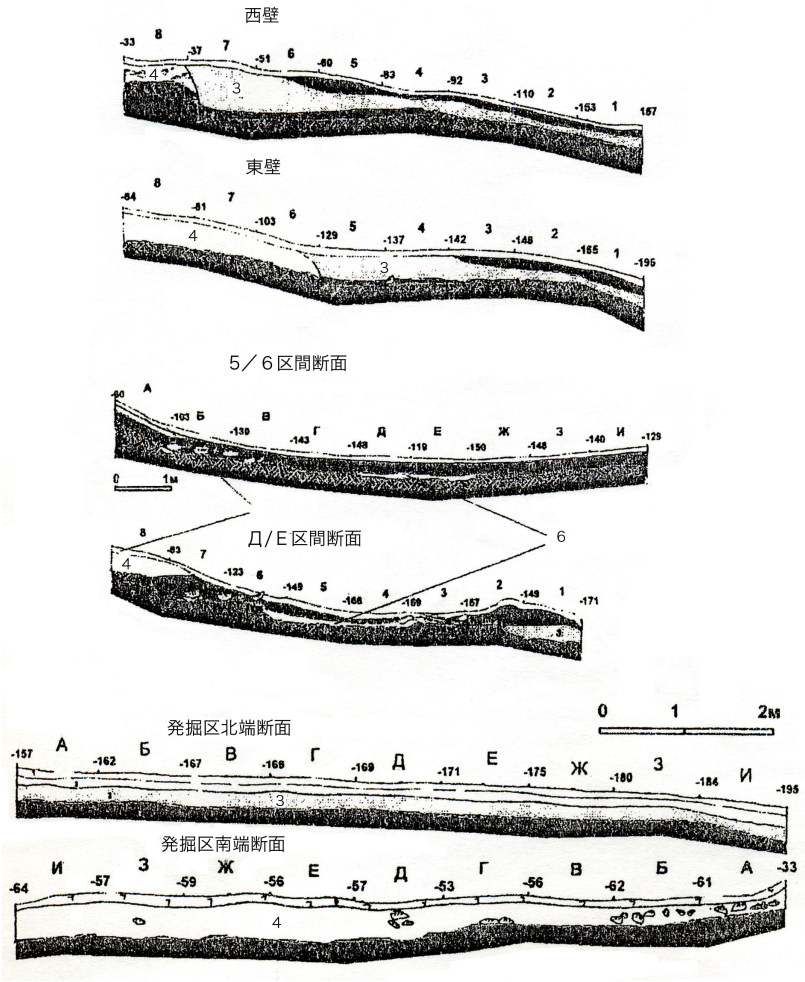

図３　発掘区地層断面図

炕建造に際して、調査した礫の内、Γ２区では縦断面楕円形の横に割られた礫（長さ 16 ㎝、幅５㎝、径 4cm）があり、Б２区では、平らな川石を用いた石鍬が見つかった。おそらく、これは中世期の住居構築に際して、炕を据える時により古い文化層を破壊した結果生まれたものであろう。

炕の両端には、炉が設けられている。その内のひとつは、炕の左部分（常用の炉）にあるもので、Ж７区、部分的に３７区にかかって位置し、垂直に立てられた板石で作られている。形状は楕円に近く、長さ約 1m、幅 50 ～ 70 ㎝である。炉の内部には赤熱した赤いシルト層（厚さ約 10 ㎝）があり、その下には黒い焦げたシルト層が厚さ約 10 ～ 13 ㎝で堆積し、その下には厚さ２～４㎝の煤の層が堆積していた。炉の南端に沿って、焼けた赤い表層が厚さ 2cm で巡っていた。

２番目の炉（おそらく１年の寒い時期に用いられた）は、Ж/３３区に位置していた。その形状は不整の楕円形に近く、長さは 1m を僅かに超え、幅は約 80 ㎝、底土の高さからの深さは 20 ～ 35 ㎝である。炉の覆土は赤熱した赤色のシルト層であった。

住居南西隅、Ａ８区では、熱気を住居から排出する為の煙出しが石で作られていた。

炕に挟まれた住居の中央部では、住居の覆土を区分している際に、堅くしまった礫を含む緑がかった褐色のシルトの床面を確認した。

住居床面の清掃時に、柱跡と思われる土坑３基を検出した。一つ目の土坑は、И５区に位置する（径 18cm、底土清掃面より 13 ㎝の深さを測る）。２つ目の土坑はИ８区に位置する（径 18cm、底土清掃面より深さ 32 ㎝）。３番目はＢ８区にあった（径 24 ㎝、底土清掃面より深さ 10 ㎝）。И 3,4 区、Ｃ－Ю ラインに沿って長さ 150 ㎝、幅４～ 6cm の焼けた木製構造物片が検出された。この部品も住居の上屋構造物に属するものと推定される。

住居出土の土器は極めて少なく、全部で破片３点（ちょうどЭ．Ｂ．シャフクーノフのトレンチと同数）である。全ての土器片は灰色、陶質で、内１片には９～13世紀のパクロフカ考古学文化に特徴的な櫛による文様が施されていた。

住居内では次のような堆積状況が明らかとなった。（図３。括弧内は層厚、㎝）

１－表土（10－11）
２－明褐色シルト（10－35）
３－暗褐色シルト（20－25）
４－赤黄褐色シルト（35－40）
５－焦げ茶色のシルト、礫を含む（25から65）
６－緑がかった褐色シルト、礫を含む（10）
７－地山；岩石片を含む赤黄色シルト

概して、住居建造の特徴は、沿海地方における女真国家東夏代（1215－1233）の類似資料（アナニエフカ城址、クラスノヤロフスク城址、シャイガ城址等）に近い。

城址の防禦施設の建造特性を明らかとするために、西側にある城壁断面を清掃した（図４）。結果、次のような壁断面の層序が明らかとなった。（括弧内は層厚、cm）

１－表土（10）
２－よごれた褐色シルト（50－100）
３－茶褐色シルト、礫を含む（25－30）
４－白っぽいシルト（7－9）
５－暗褐色シルト（7－9）
６－白っぽいシルト（7－9）
７－暗褐色シルト、礫を含む（7－9）
８－白っぽいシルト（7－9）
９－褐色シルト（7－9）
10－白っぽいシルト、礫を含む（7－9）
11－白っぽいシルト（7－9）
12－混じった層（10－15）
13－白っぽいシルト（10）
14－茶褐色シルト、礫を含む（10－15）
15－白っぽいシルト（10－15）
16－白っぽいシルト、礫を含む（10－15）
17－白っぽいシルト（10－15）
18－茶褐色シルト（10－15）
19－混じった層（10－15）
20－白っぽいシルト（10－15）
21－茶褐色シルト（10）
22－白っぽいシルト、礫を含む（10）
23－白っぽいシルト（10）
24－埋没表土（10）
25－白っぽいシルト、細かな礫を含む（15）
26－底土；白っぽいシルト

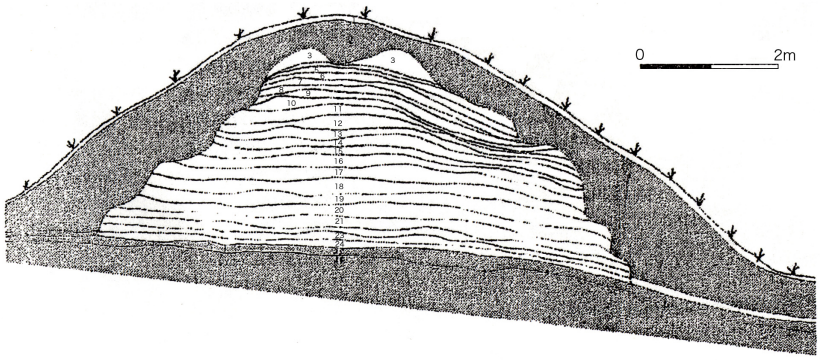

図４　ノヴォポクロフカ２城址城壁断面

清掃により壁の建造特性が明らかとなった。壁は東夏で広く普及した版築で作られていた。まず、50㎝までの高さに柴を編んで型枠を作り、その後、その中に土を満たした後に順に突きならす。一つの型枠内に土が充満すると、新たな型枠を組み合わせるが、これは下のものより小さいものであ

り、その為、壁断面は段を持った形状を持っている。外側の段は、内側に比べてより急になっている。新たな型枠も土で満たされる。この作業を４回行い、おそらく、建築的に強いものとなり、壁が崩壊するのを防いだのであろう。

おそらく、壁には木の柵を建造し、表面を混和土で補強したのだろう。この事は、最上部の版築層上の、中央に深い窪みのある灰白色粘土層（3 層）の存在が証明している。この作業を終えた後、構造物上部はを新たな土の層(よごれた褐色のシルト)で覆われた。追加の土盛りの厚さは約 1m である。

城壁築造の同じような構造は、中世の沿海地方における他の当該期の考古学遺跡（クラスノヤロフスコエ土城、ユジノーウスリースク土城、ザーパトナヤーウスリースク土城、マリヤノフスコエ土城、アナニエフカ土城他)でも認められる。それらでは、同様に築造された防禦設備－城壁が遺されている。

以上のように、城域は、おそらく新石器時代に始めて人が利用し、後の鉄器時代に開発され、この時、城の北東部分で小規模な不整形の防禦施設が建設された。城址そのものは、出土した資料や明らかにされた施設が、沿海地方南部・中央部の女真国家東夏期（1215 － 1233 年）のものと考えられるので、おそらく 12 世紀末～ 13 世紀初頭に建造されたのだろう。しかしながら、得られた土器資料は、沿アムールと沿海地方北部の一部に展開した 9 ～ 13 世紀のパクロフカ考古学文化に属している。

文化層に厚みがない事は、城の存続期間がかなり短いことを示している。また、ここには実際瓦が出土していない事も興味深く、この事は大規模な行政施設や寺院が存在しなかった事を証明しよう。

付近に存在し、やや古く建造されたノヴォポクロフカ１城址が地域における文化・行政の中心であったと推測される。この時、ノヴォポクロフカ２城址は、明らかに、防禦を目的とした特殊なものであった。まず、ここには付近の住民、おそらくはノヴォポクロフカ１城址の人々もまた、集めることができた。次に、城はイマン川中流域の交通を遮断するものであった。

これら全ての事は、ノヴォポクロフカ２城址が東夏の前線基地であり、帰属は異なるが民族的には同系統の文化に属するこの領域の住人を支配する為のものであったと推測する根拠を与えてくれる。この推論を確定するには、城域のより大規模な考古学的調査が必要である。

注

１）Надаров, И.П, Северо-Уссурийский край. СПб, 1877, 29-30.

２）Мезенцев, А.Л., Крупнейший памятник Северного Приморья, Археология Северной Пасифики, Владивосток, 1996.

３）Архив ИА РАН. Ф.1. Р.-1, №.3050, 34-35.